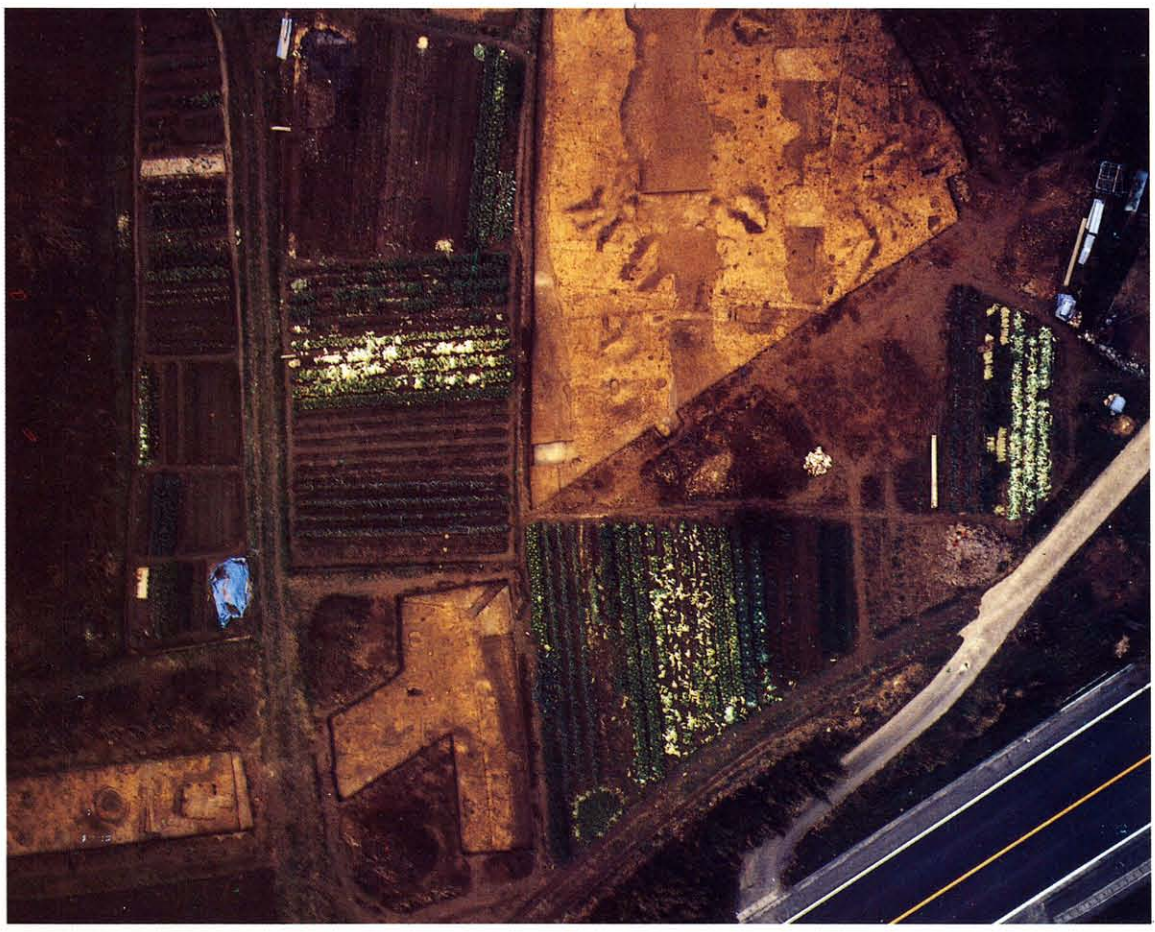
築館町文化財調査報告書第９集

伊治城跡

－平成７年度：第22次発掘調査報告書－



外郭南西地区

平成８年３月

宮城県　築館町教育委員会

伊治城跡

－平成７年度：第22次発掘調査報告書－

平成８年３月

築館町教育委員会

伊治城跡全景

中央の集落のある台地全体が遺跡範囲

この空中写真(昭和51年撮影)は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院撮影の写真を掲載したものである。
(承認番号　平8東複第281号)

序

築館町がめざしているまちづくりの基本理念は、歴史、伝統、文化、自然を活かしながら、優しいこころにつつまれた歴史と未来がクロスするまちづくりであります。このため、旧石器時代から現代へと続く歴史的遺構・文化財の調査研究と保護・活用に積極的に取り組んでいるところであります。

近年、高森遺跡・上高森遺跡から杉薬師にいたる歴史的遺構の調査・保存を行っているところでありますが、伊治城跡の調査保存もその一貫として行っているところであります。

伊治城につきましては、史書にその創建が記されておりますが、長年、その所在地は特定できておりませんでした。そこで、昭和52年度より３年間、宮城県多賀城跡調査研究所が、続いて、昭和62年度より築館町教育委員会が、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、有力な擬定地であった城生野地区において発掘調査を進めてまいりました。その結果、平成３年度の調査においては、伊治城の中枢である政庁を確認するに至りました。その後も伊治城跡の規模・構造を解明する発掘調査を毎年続けております。

本年度の調査は、昨年までの成果をうけて、伊治城の範囲をつかむため、南西部の外郭区画施設の検出を目的に進めました。調査の結果、外郭南西地区では区画施設の一部とみられる大溝跡を検出いたしました。また、内郭北地区では、昨年一部が検出されていた掘立柱建物跡の柱穴を３基検出し、建物跡の規模がほぼ解明されました。

調査を担当した築館町教育委員会の職員をはじめ、調査並びに指導や出土遺物の整理と報告書の作成まで協力をいただきました、宮城県教育庁文化財保護課の皆さん、特に直接担当されました、佐久間光平技術主査、八嶋伸明技師に深く感謝を申し上げるとともに、今後も調査を進めてまいりますので、ご指導をお願い申し上げ挨拶といたします。

平成８年３月

築館町教育委員会

教育長　南　條　正　臣

例　　言

1．本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成７年度発掘調査（第22次調査）の成果をまとめたものである。

2．調査は、国庫補助事業計画にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。

3．調査期間・面積は調査要項に示したとおりである。

4．調査時における地区割りは、城生野公民館前の伊治城跡「原点１」を基準点(0．0)とし、この点と「原点２」とを結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は2° 8′ 8″ 西偏する。基準点の座標値（第Ｘ系）は以下のとおりである。

原点１　　Ｘ＝－137,175.996　　Ｙ＝18,059.271

原点２　　Ｘ＝－137,172.798　　Ｙ＝18,145.712

5．本遺跡の位置を示した地形図(第２図)は、建設省国土地理院発行の１／25,000の地形図「金成」「築館」を複製して使用した。

6．調査成果の一部は、現地説明会、第９回宮城県遺跡調査成果発表会、第22回古代城柵官衙遺跡検討会ですでに公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。

7．発掘調査および報告書作成にあたっては、宮城県多賀城跡調査研究所をはじめ多くの方々のご協力をいただいた。

8．本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、課員の検討を経て、佐久間光平・八嶋伸明が資料整理にあたり、佐久間が編集・執筆した。

9．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が保管している。

10．なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書(11冊)については、本文の後の付表１にまとめて示してある。

凡　　例

1．図中の方位は、座標北を表している。

2．図の縮尺率は、各図ごとに示した。

3．図中の地区割り：Ｗ－150、Ｓ－400などの表記は、原点１から西に150ｍ、南に400ｍであることを表す。

4．遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は前年度からの通し番号で、本調査では420～444を使用し、各遺構に付した。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＩ：竪穴遺構　ＳＫ：土壙

ＳＸ：その他（溝状遺構など）

5．土色の記述は「新版標準土色帳」(1973）にもとづいた。

調　査　要　項

1．遺 跡 名　伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）

2．所 在 地　宮城県栗原郡築館町字城生野

3．調査主体　築館町教育委員会

4．調査担当　宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会

宮城県文化財保護課　佐久間光平　八嶋　伸明

築館町教育委員会　　千葉　長彦

5．調査期間　第22次調査：1995年10月５日～11月14日

6．調査面積　約1,140㎡

①外郭南西地区（Ａ～Ｃ$_{1\cdot2}$区）　936㎡

②内郭北地区（Ｄ区）　　204㎡

7．調査協力　高橋　金作　高橋　一男　高橋　一司　高橋　安麿　小野寺たか子

千葉　朋義　千葉　昭治（敬称略）

目　　次

序

例　　言・凡　　例

調査要項・目　　次

Ⅰ．遺跡の概要……1

Ⅱ．遺跡の位置および周辺の遺跡……1

Ⅲ．第22次調査……3

1．調査の目的……3

2．調査の方法と経過……6

3．検出遺構と遺物……7

①外郭南西地区……7

②内郭北地区……18

4．考　　察……21

引用・参考文献……24

付表１．「伊治城跡」発掘調査および報告書一覧

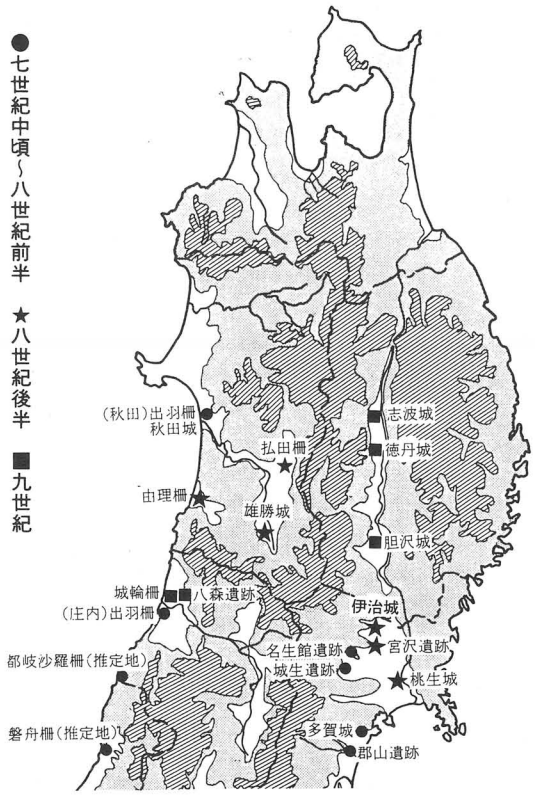
２．伊治城および栗原郡に関する古代史年表

報告書抄録

写真図版

Ⅰ．遺跡の概要

伊治城は、律令政府が陸奥国経営の一環として神護景雲元年(767)に現在の宮城県北部の栗原地方に設置した城柵である(第１図)。続日本紀や日本後紀には延暦15年(796)までの約30年間、この城柵に関する記録が登場する(付表２参照)。なかでも、この地域(上治郡)の大領であった伊治公呰麻呂が宝亀11年(780)に按察使紀広純と牡鹿郡大領道嶋大楯を伊治城で殺害し、さらに国府多賀城を攻撃し放火するという「伊治公呰麻呂の乱」は、当時の政府には衝撃的な事件であった。



第１図　東日本の古代城柵（進藤1991より）

この伊治城の所在地については、これまでいくつかの候補地があった。しかし、有力な擬定地であった当地の発掘調査が多賀城跡調査研究所によって昭和52年から３年間、その後昭和62年度からは築館町教育委員会・宮城県教育委員会によって毎年継続的に調査が行われ、本遺跡が伊治城であることは確実になった(付表１参照)。これまでの調査によって、伊治城は東西約700ｍ、南北約900ｍほどの広がりをもち、台地の南東部に東西約56ｍ、南北61ｍの築地塀でかこまれた「政庁」、この政庁をさらに取り囲む東西185ｍ、南北240ｍの範囲に「官衙」域、その外側には竪穴住居群が配置されるという構成であることが次第に明らかになってきた。また、「政庁」域の建物群は大きく３時期の変遷があることや大規模な火災があったことなども確認されている(築館町教育委員会 1993)。

Ⅱ．遺跡の位置および周辺の遺跡

本遺跡は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城の北約52kmの位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分かれている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵東端部の標高20～25ｍほどの平坦な河岸段丘上に立地している(第２図)。この段丘は南西部で背後の丘陵と接続しているが、周囲を一迫川・二迫川などの河川や小さな谷によって画され、北に張り出す独立した地形をなしている。周囲の沖積面との比高差は約５～６ｍである。遺跡の範囲はこの段丘の全域にわたり、その範囲は東西約700ｍ、南北約900ｍと推定されている。

遺跡は現状では宅地や畑地・水田として利用されているが、段丘の北端部には東西にのびる長さ150ｍほどの空堀状の大溝と、その北に接して走る土塁状の高まりが今でも残っている。これらは、昭和52年度の多賀城跡調査研究所の調査によって伊治城跡の北辺の外郭施設であることが確認された（多賀城跡調査研究所 1979）。

本遺跡（第２図-1）の周辺には、奈良•平安時代の遺跡が多く分布する。一迫川や二迫川沿いの河岸段丘や低い丘陵上には佐野遺跡(6)、 糠塚遺跡(7)、大門遺跡(8)、御駒堂遺跡（14）、長者原遺跡（21）などの集落遺跡がある。なかでも、糠塚遺跡では奈良・平安時代の住居跡が30棟検出されており、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式の基準資料になるものである（小井川・手塚 1978）。また、御駒堂遺跡は８世紀初頭に関東地方からの移住が想定されるような遺物や遺構が発見されており（小井

No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	伊治城跡	段丘	城柵跡	古墳、奈良・平安
2	栗原寺跡	丘陵	寺院跡	古代
3	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
4	大沢横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳、古代
5	姉歯横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳
6	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古代
7	糠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、奈良・平安
8	大門遺跡	段丘	集落跡	縄文、奈良・平安、中世
9	狐塚遺跡	段丘	窯跡	古代

No.	遺跡名	立地	種別	時代
10	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古代
11	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世
12	鶴ノ丸遺跡	段丘	城館、集落跡	縄文～近世
13	宇南遺跡	段丘	城館、集落跡	縄文～近世
14	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	縄文～近世
15	山ノ上遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代
16	木戸遺跡	丘陵	集落跡	縄文、古代
17	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落跡	縄文、弥生、奈良・平安
18	嘉倉貝塚	丘陵	貝塚	縄文、弥生

No.	遺跡名	立地	種別	時代
19	照越台遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古墳、古代
20	西館遺跡	段丘	城館、包含地	縄文、中世
21	長者原遺跡	段丘	集落跡	古墳、古代
22	堀切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
23	大仏古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳
24	宮野館跡	丘陵	城館	中世
25	高田山遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
26	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳
27	築館城跡	丘陵	城館	中世、近世

第２図　伊治城跡と周辺の遺跡

川・小川 1982)、栗原郡の建郡(神護景雲３年：769)以前のこの地域の動向を知る上で注目される。

なお、本遺跡の東４kmには、ヘラ切り無調整の坏を主体に焼成した志波姫町狐塚遺跡(9)、さらに北方６kmには須恵器や瓦を焼成した金成町小追観音窯跡があり、ここの製品が本遺跡にも供給されていた可能性がある。

Ⅲ. 第 22 次 調 査

１. 調査の目的

先にも述べたように、これまでの調査によって伊治城跡の「政庁」の構造や変遷、その周辺域の構成も徐々に明らかになってきている。こうした成果を受けて、第22次調査は以下のような目的をもって調査を進めた。

①　南西部の外郭区画施設の確認

これまで発掘調査によって伊治城跡の外郭線が明確に確認できているのは、土塁と大溝跡のある北辺のみである(第３図)。これは現状でも台地の縁辺に沿って約150ｍほどにわたりその痕跡を観察でき(写真１)、昭和52年度の多賀城跡調査研究所の調査によってその存在が確かめられている(多賀城跡調査研究所 1978)。

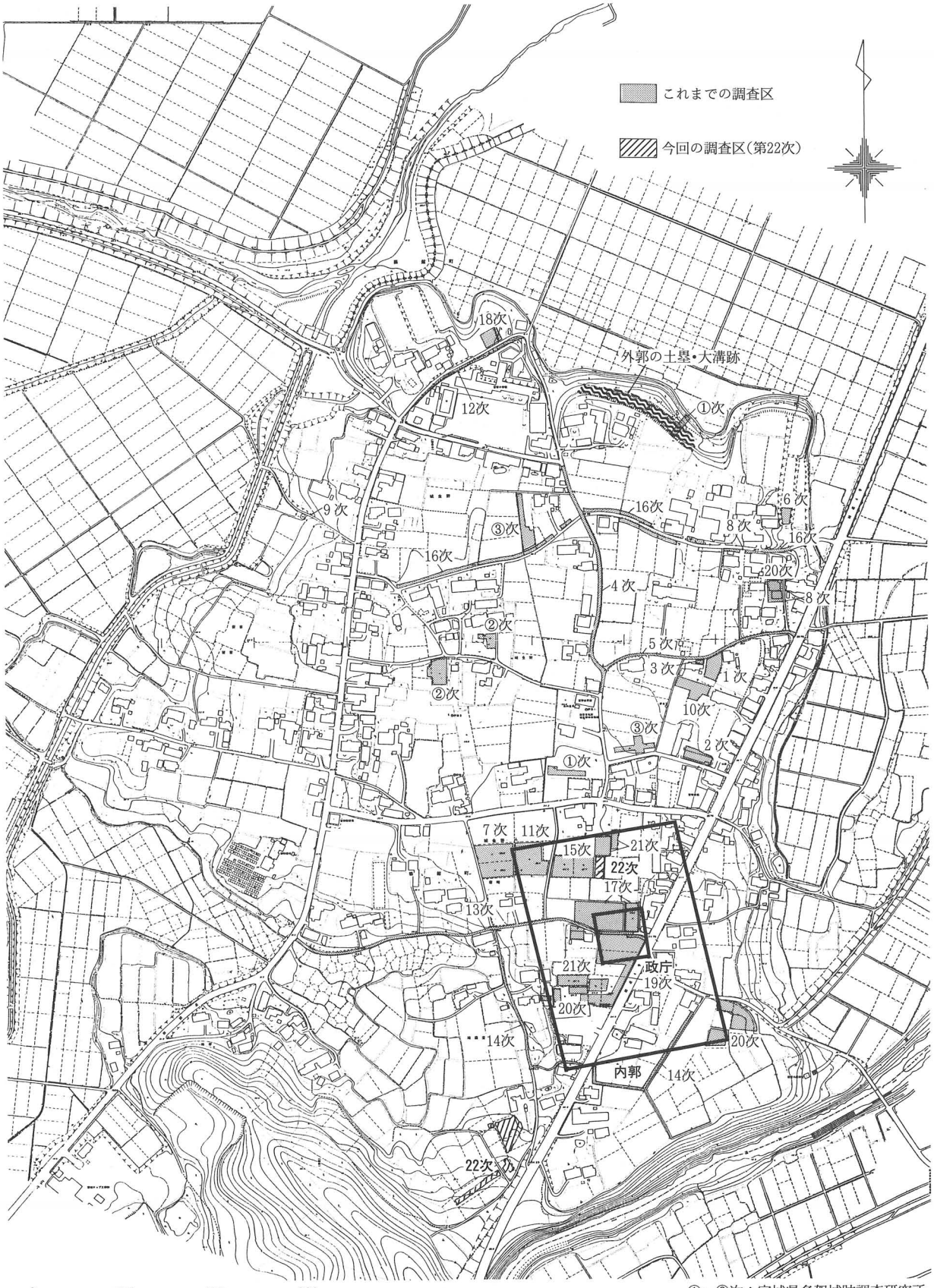
写真１　外郭北辺　(北から南をのぞむ)

この他、断片的ではあるが、その延長線上(西へ約100ｍ)で道路の拡幅工事に伴う調査によって２条の大溝跡が、また、台地東端部でも道路の拡幅工事に伴う調査で２条の南北方向の大溝跡が検出されている(築館町教育委員会 1990・1991)。両地点とも調査区が狭く土塁などは発見されていないが、大溝跡の規模とその位置から考えて、これらは外郭区画施設の可能性が高いと考えられている。一方、写真(昭和37年撮影)しか残っていないものの、台地の西縁部でも南北に走る土塁と大溝跡が存在したようである(築館町教育委員会 1989)。

このように北辺を除いては部分的な確認ではあるが、伊治城跡の外郭は土塁と大溝によって構成され、これらは台地の縁辺にそってめぐっていると想定することが可能である。しかし、南辺から西辺へといたる地点は背後の丘陵と接続する場所のため外郭線の位置が不確実である。そこで、第22次調査は外郭線が通る可能性が高いとみられる丘陵裾部に調査区を設定し、その位置を確定するとともに区画施設の構造を捉えることにした。

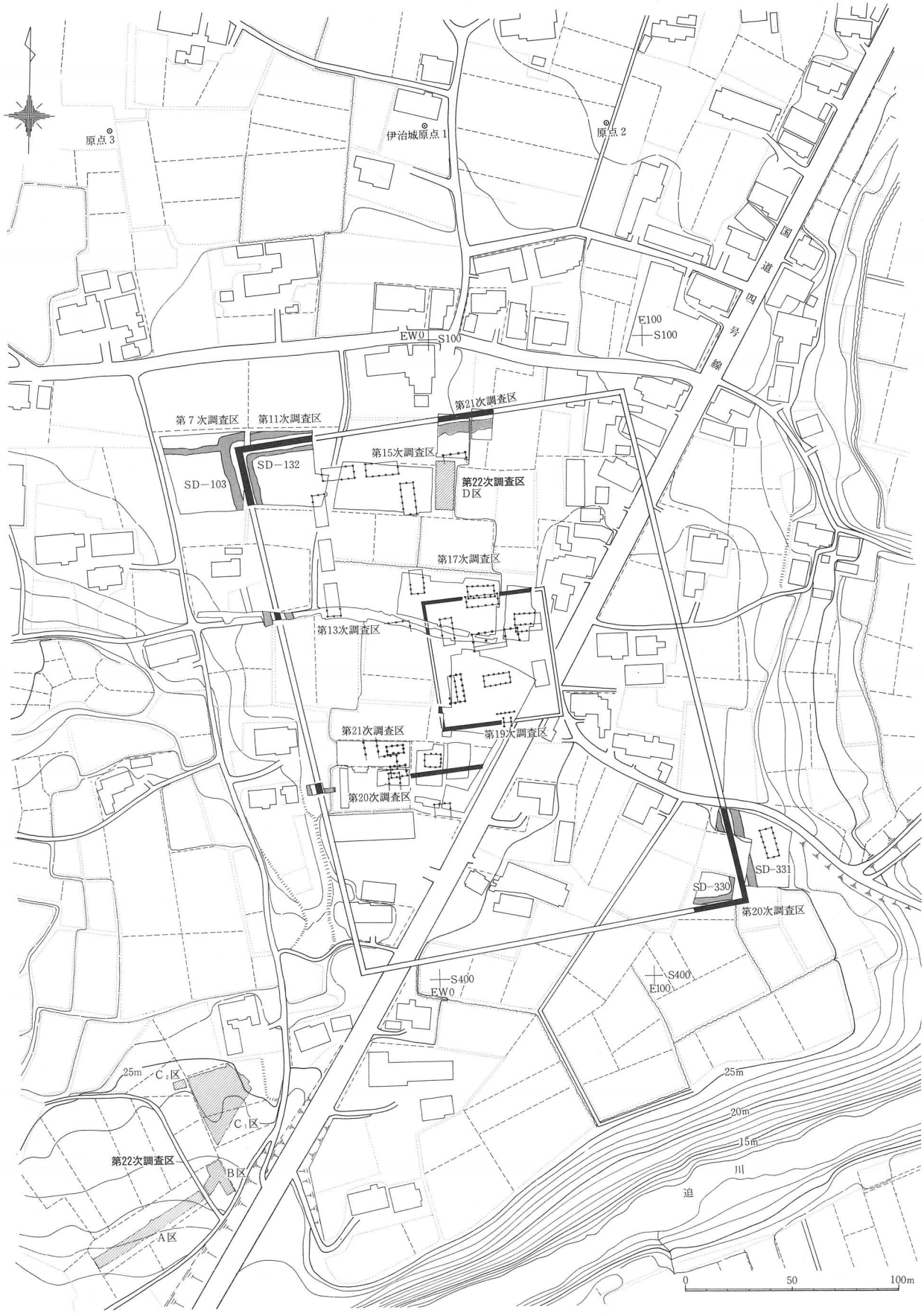
②　SB410掘立柱建物跡の規模・構造の確認

昨年の内郭北地区の調査では、一辺が約2.2ｍ、深さが約1.6ｍという非常に大きな柱穴をもつ掘立柱建物跡(SB410)が発見されている。昨年の調査ではこの建物跡の規模・構造が分からなかったので、第22次調査ではその南側に調査区を設定し、それを確認することにした。また、あわせて他に建物跡などの遺構がないかどうかも調査することにした。



①～③次：宮城県多賀城跡調査研究所
1～22次：築館町教育委員会
（付表1を参照のこと）

第3図　伊治城跡と調査区



第４図　第22次調査区の位置

2．調査の方法と経過

第22次調査は10月５日から開始した。調査地点は①外郭南西地区と②内郭北地区の２地点あり（第３図・第４図）、調査は外郭南西地区から始めた。この地区は外郭線の確認という目的のため、丘陵側から政庁側へできるだけ長く調査区を設定することにしたが、この地点は畑地で収穫前のものもあったので、第４図のようにＡ～Ｃ区の場所を調査区として選定し、幅５ｍのトレンチを入れることにした。そして、遺構の検出状況に応じて調査区を拡張することにした。

調査は、丘陵側のＡ区から重機によって表土除去をはじめて順次Ｂ区・Ｃ区へと進め、精査を行った。Ａ区は丘陵側（南西部）では遺構が検出されなかったが、中央部からＢ区側（北東部）にかけては掘立柱建物跡（SB440／437）や井戸跡（SE436）、竪穴遺構（SX435）、溝状の遺構（SX439）などが発見された。しかし、大溝や土塁などの区画施設は検出されなかった。Ｂ区では東側の地境に平行して溝跡の一部が検出された。そこで、地境側で調査区を拡張したところ、この地境にそって溝跡SD420・431があることがわかった。次にＣ区側で調査を行ったところ、Ｂ区の溝跡（SD420）の延長がやはり地境にそって発見された。また、この溝跡の東側では、平行して２条の溝状遺構（SX421／422）があることが分かった。そのためこの調査区も拡張したところ、SD420溝跡、SX421・422溝状遺構は平行して南東から北西方向に走っていること、SD420溝跡は幅５ｍほどの大溝になること、また、掘立柱建物跡（SB426／427）があることなどが確認された。大溝跡（SD420）は、この拡張によってＢ区からＣ区へかけて総長約50ｍほど確認されたことになるが、ちょうど地境のため溝の両辺がともに確認できている区域がなかったので、Ｃ区の北西部に４ｍ×4.5ｍ（約20㎡）の調査区を新たに設定した（この調査区をC_2区、それまでのＣ区をC_1区とした）。調査の結果、SD420大溝跡はこの地点では幅が4.5ｍほどになることが明らかになった。

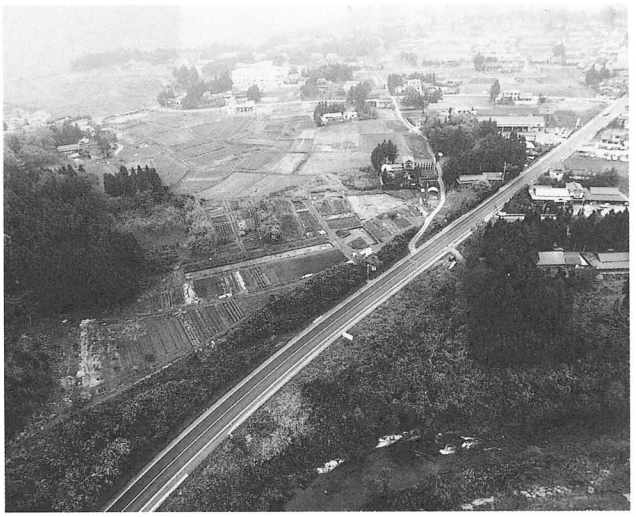


写真２　外郭南西地区（南から）

遺構の平面的な確認が終了した段階で一部掘り下げをおこなった。SD420大溝跡は２ケ所トレンチをいれたが、いずれも深さが50～60㎝と浅いことが判明した。また、SX421／422溝状遺構は両辺が共に曲がりくねっており、深さは20～30㎝で底面には凹凸があること、堆積土は一度に埋め戻されたような状況を呈していることなどから、土取り痕の可能性が高いことが分かった。

外郭南西地区の調査途中に、内郭北地区の調査も開始した。深さ約30～40㎝の表土を重機で除去し、その後、精査をおこなった。その結果、SB410掘立柱建物跡の南西部のコーナー部分を検出し、これでこの建物跡は２間×３間の東西棟であることが判明した。この他に建物跡はなく、土壙（SK443）と円形周溝？（SX444）とみられる遺構を確認した。

調査を開始して間もなく伊治城原点１を基準にしたグリッドポイントを設置し、遺構の精査・掘り下げと平行して平面図・断面図(S:１／20)の作成を行った。適宜、写真撮影(カラースライド・白黒)も行い、11月10日には記録をほぼ終えた。その後、補足的な調査とともに空撮を行い、11月14日には全調査を終了した。

なお、11月９日には報道機関、11月11日には一般を対象にした現地説明会(参加者約100名)を実施した。

３．検出遺構と遺物

①　外郭南西地区（第５図）

この地区で発見された遺構には、外郭区画施設に関わるとみられる大溝跡(１条)・溝状遺構(２条)、ほかに掘立柱建物跡(５棟)、竪穴遺構(１基)、井戸跡(１基)、溝跡(９条)などがある。

遺物は少なく(第８図)、土師器・須恵器、瓦片、鉄製品(釘)、鉄滓が若干数出土したにすぎない。

写真３　外郭南西地区

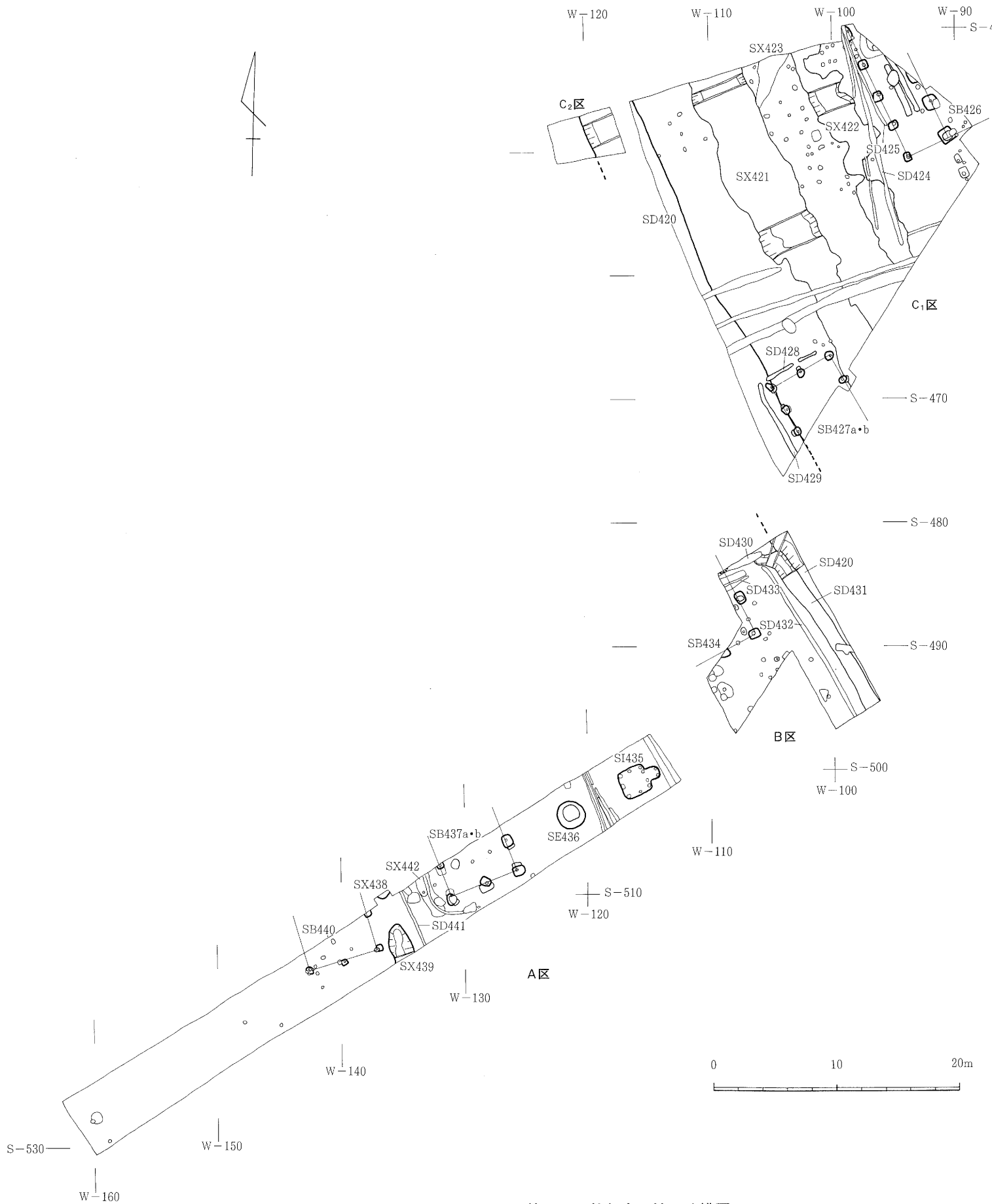
《大溝跡》

【SD420】(第６図)　B区～C_1・C_2区で検出した。第６図に示したようにちょうど地境と一致しているため一部の検出にとどまっているが、南東方向から北西方向に直線的に総長約50ｍほど確認した。幅は約4.5ｍ～５ｍほどと推定される。C_1区でSB427掘立柱建物跡、B区でSD431と重複しており、これらよりは時期的に古い。それぞれの調査区で部分的に掘り下げたところ、深さは約50～60㎝と浅く、底面はほぼ平坦で断面形は逆台形をなしていることがわかった。堆積土はC_1区では下半が自然堆積土で、上半が黄褐色シルトブロック混じりの人為的埋土とみられるものである。一方、C_2区ではすべて自然堆積土である(第７図)。これらの堆積土はいずれも水成堆積ではないことから、大溝は空堀状であったものとみられる。

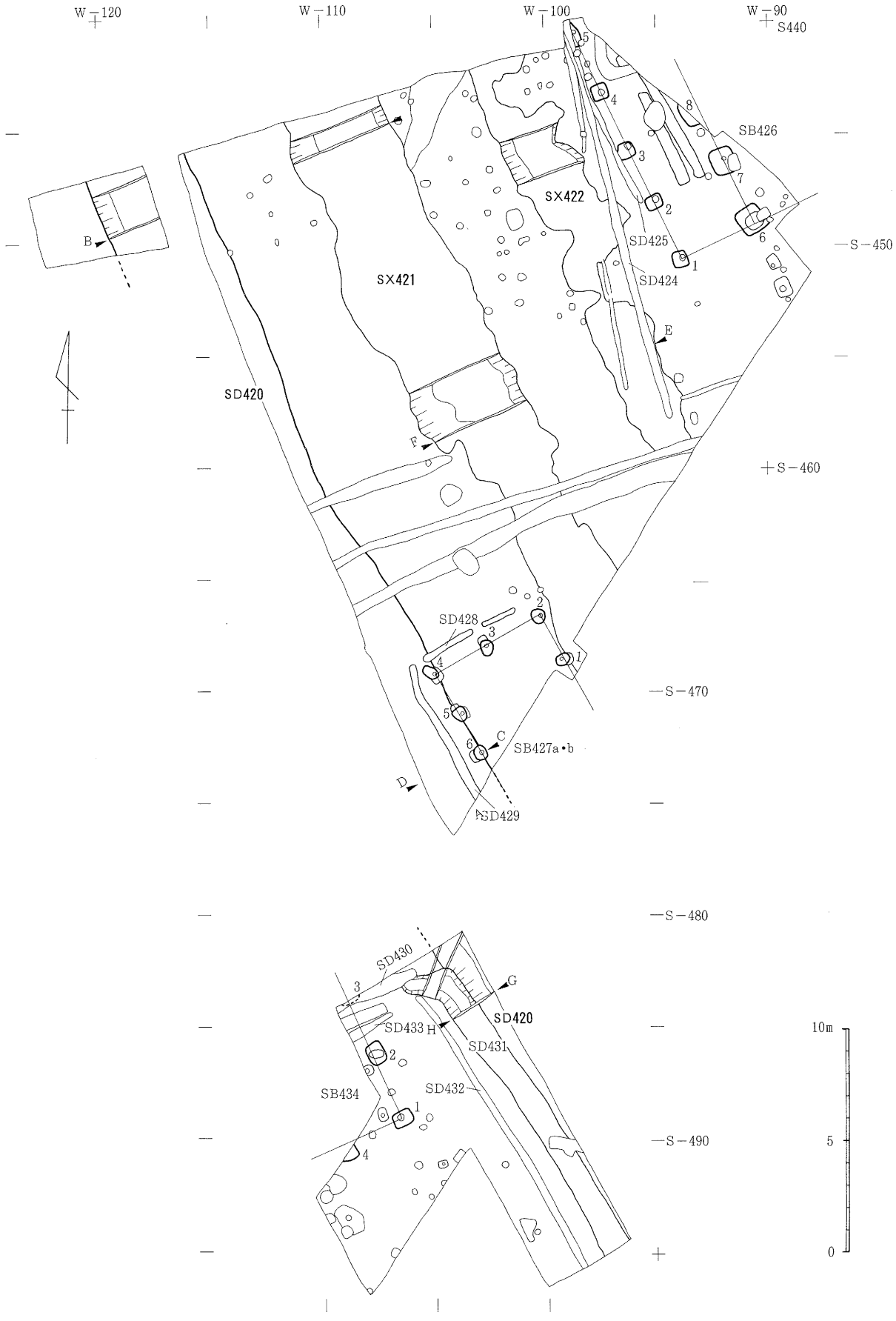
遺物はわずかであるが、上層から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・鉢・甕などが出土している(第８図１～４)。

《溝状遺構》

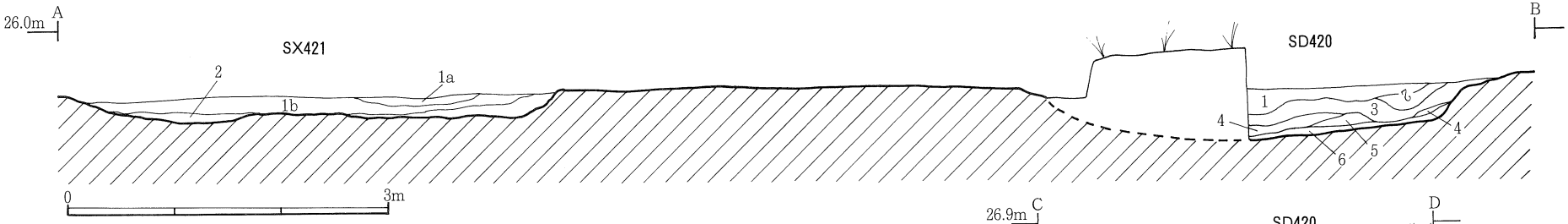
【SX421】(第６図)　C_1区中央付近を南東から北西方向へのびる。先述のSD420大溝跡と平行する。SD420との幅は４～５ｍほどである。確認長は約31ｍ、両辺は直線的ではなく曲がりくねっている。



第５図　外郭南西地区遺構図

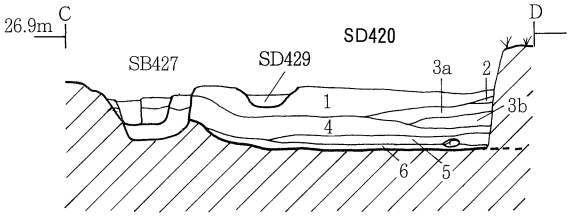


第６図　SD420大溝跡とSX421・422溝状遺構



SX421

層No.	土色	土性	備考
1a	にぶい黄褐色 (10YR5／4)	砂質シルト	人為的埋土　灰色味あり、黄褐色シルトブロックの混じりは殆どなし、炭化物(φ5mm)若干
1b	〃	〃	〃　明黄褐色(10YR6／6)シルトブロックを不均質に多く含む、しまり良、粘性なし
2	褐色 (10YR4／4)	シルト	自然堆積土か、比較的均質、炭化物(φ3mm)若干、しまり良、粘性なし

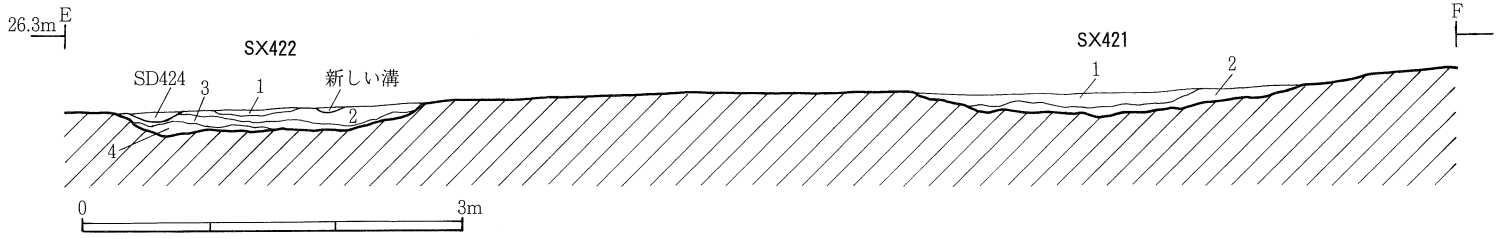


SD420：C_2区

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3／4)	シルト	自然堆積土　比較的均質、炭化物(φ5mm)若干、しまりやや不良、粘性なし
2	〃	〃	〃　にぶい黄褐色シルト(10YR7／4)小ブロック若干含む、しまりやや不良、粘性なし
3	黒褐色 (10YR3／2)	シルト	〃　1層に比べ黒味がかる、炭化物(φ5mm)若干含む、しまり良、粘性なし
4	にぶい黄褐色 (10YR5／3)	シルト	〃　3層に比べ黒味がとれ褐色味あり、均質、しまり良、粘性なし
5	にぶい黄褐色 (10YR5／4)	砂質シルト	〃　マンガン粒(φ2～3mm) やや多く含む、しまり良、粘性なし
6	灰黄褐色 (10YR6／2)	シルト質砂	〃　砂質分多い、網状斑あり、炭化物(φ5mm) 若干含む、しまり良、粘性なし

SD420：C_1区

層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5／4)	砂質シルト	人為的埋土か　黄褐色(10YR6／6) 砂質シルトブロック多い、炭化物・焼土粒(φ5mm～1cm)若干
2	にぶい黄褐色 (10YR4／3)	〃	〃　部分的な層、1層に似るが黄褐色シルトブロックはやや少ない
3a	明黄褐色 (10YR6／6)	シルト	〃　灰黄褐色(10YR6／2)シルトブロック多い、しまり良、粘性なし
3b	〃	〃	〃　基本的に3a層と同じだが、灰黄褐色シルトブロックの含まれる割合が多い
4	灰黄褐色 (10YR5／2)	シルト	自然堆積土　明黄褐色(10YR6／6)シルトブロック若干、炭化物・焼土粒(φ5mm～1cm)一部入る
5	〃	〃	〃　明黄褐色シルトブロックをやや多く含む
6	〃 (10YR4／2)	粘質シルト	〃　比較的均質、しまり不良、粘性ややあり



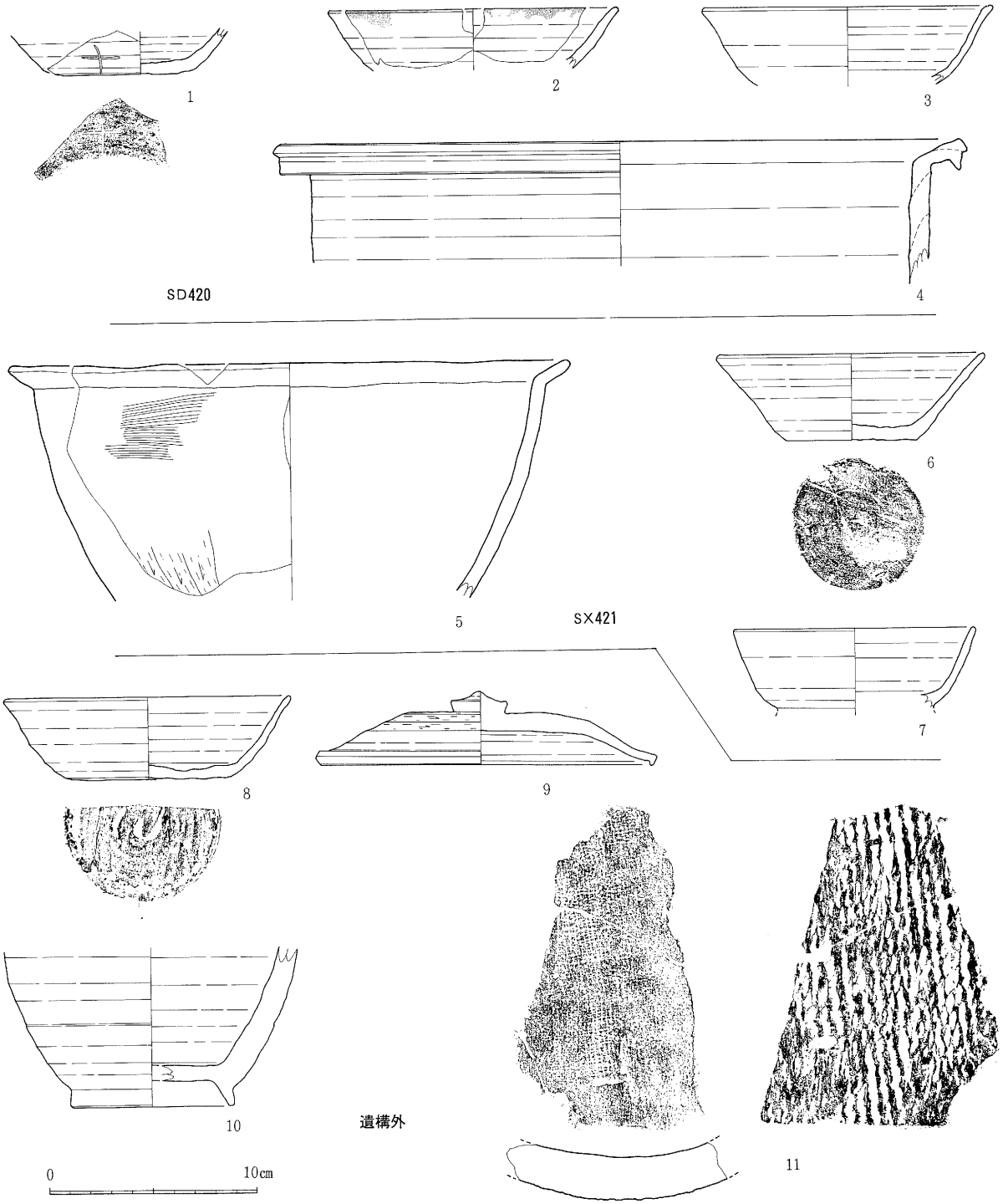
SX422

層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4／4)	シルト	人為的埋土
2	にぶい黄褐色 (10YR5／4)	粘質シルト	人為的埋土、地山ブロック(φ3cm以下) を多く含む、炭化物少量含む
3	褐色 (10YR4／4)	シルト	炭化物少量
4	にぶい黄褐色 (10YR5／4)	粘質シルト	地山ブロック(φ3cm以下) を多く含む、炭化物少量含む

SX421

層No.	土色	土性	備考
1	黄褐色 (2.5Y5／4)	砂質シルト	人為的埋土　地山ブロック(φ3cm以下) を不均質に多く含む
2	灰オリーブ (5Y5／2)	〃	〃　グライ化

第7図　SD420とSX421・422の断面図



No.	器種	区・遺構・層	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	写真図版
1	須恵器 坏	C_1 SD420埋1	1/6	−	(7.2)	−	外面：ロクロナデ →(+)ヘラ書き 内面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→ナデ	9－1
2	〃 〃	〃 〃	1/6	(14.0)	−	−	内外面：ロクロナデ 口縁部にタール状付着物	2
3	〃 〃	〃 〃	1/6	(13.4)	−	−	内外面：ロクロナデ	3
4	〃 鉢	〃 〃	1/20	(33.4)	−	−	内外面：ロクロナデ	4
5	土師器 鉢	〃 SX421埋1	1/20	(27.0)	−	−	外面：(上)ヨコナデ (下)ヘラケズリ 内面：マメツ	7
6	須恵器 坏	〃 〃	1/4	(12.8)	6.2	4.2	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→ナデ	5
7	〃 高台付坏	〃 〃	1/8	(11.6)	−	-	内外面：ロクロナデ	6
8	〃 坏	〃 表土	1/3	(13.8)	8.0	4.0	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→ナデ	8
9	〃 蓋	〃 〃	3/5	(16.4)		3.5	外面：ロクロナデ →回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	9
10	〃 長頸壷	A 〃	1/4	−	(7.8)	−	内外面：ロクロナデ	10
11	平 瓦	C_1 〃					凹面：布目+ナデ 凸面：縄叩き目	11

第８図　外郭南西地区　出土遺物

幅は最大で5.4m、最小で2.4m。一部掘り下げたが、深さは20～30cmで、底面には凹凸がある。埋土は黄褐色シルトブロック混じりのにぶい黄褐色砂質シルト主体で、一度に埋め戻されたような状況を呈する。

遺物には、土師器坏・蓋・鉢・甕、須恵器坏・高台付坏・甕などがある(第8図5～7)。

【SX422】(第6図)　SX422と同様の特徴をもつ。C1区東寄りを南東から北西方向にのびる。SD420溝跡およびSX421溝状遺構と平行する。SX422との幅は4m程度である。両辺は直線的ではなくSX421よりも曲がりくねっている。確認長は約24m、幅は最大で3m、最小で60cm。一部掘り下げたが、深さは20～30cm、底面には凹凸がある。埋土は黄褐色ロームブロック混じりの褐色シルトで、やはり一度に埋め戻されたような状況を呈する。

遺物には須恵器甕などがある。

《掘立柱建物跡》

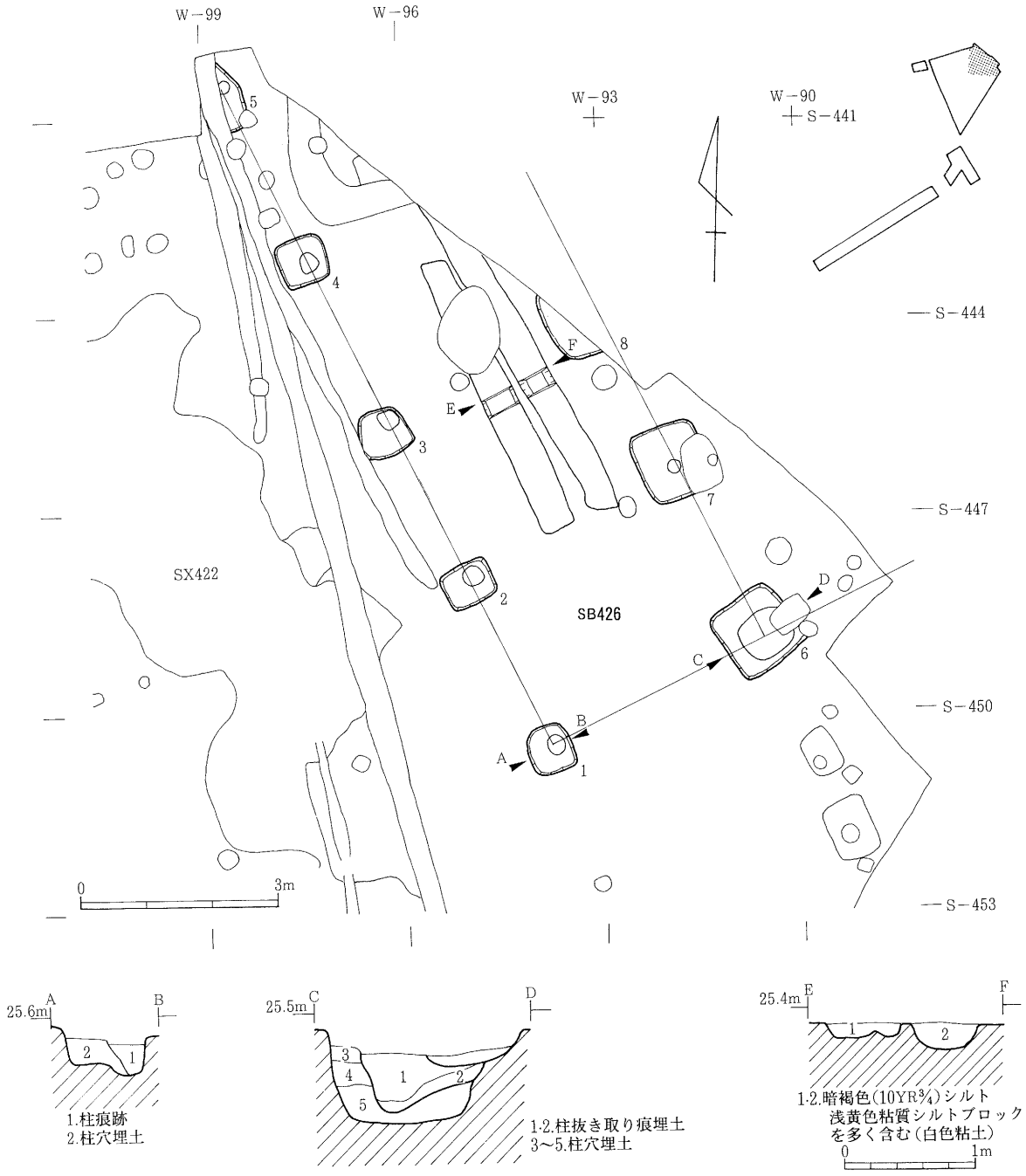
【SB426】(第9図)　C1区東側で一部分検出した。廂付きの建物跡と推定される。建物跡の身舎の柱穴は南北に2間、廂の柱穴は南北に4間分確認した。身舎の柱間寸法は2.8m、廂の柱間寸法は南から2.8m・2.7m・2.7m・2.9m、身舎と廂の柱間寸法は3.2～3.3mである。身舎の柱穴は隅丸方形を呈し、一辺が約1.1m、深さは70cm、中央に径20cm程度の円形の柱痕跡が認められるものと柱抜取り痕があるものがみられる。廂の柱穴は一辺が約70cmの隅丸方形を呈し、深さは30cmほどである。径約20cmの円形の柱痕跡がいずれも認められる。身舎・廂の柱穴掘り方埋土には白色粘土ブロックが比較的多くはいるのが特徴である。また、柱痕跡埋土には焼土・炭化物が多く含まれており、この建物跡は火災を受けた可能性がある。

なお、身舎柱列と廂柱列の間に、これらの柱列に平行して2条の溝状遺構が認められる。西側は長さ約4.5m、幅40～50cm、深さ10cm、東側は長さ5.5m以上、幅50cm・深さ20cmで、両者とも埋土は一度に埋め戻されたような状況を呈し、白色粘土ブロックを含むのが特徴である。内部には柱痕跡などは明瞭には認められなかった。性格は不明であるが、その形状や埋土の状況からSB426建物跡に付属する遺構と考えられる。

【SB427】(第10図)　C1区南端で一部分検出した。南北2間以上・東西2間の規模で、一度建て替えが認められる。西側および北側柱列から70cm～1mほど離れてそれぞれ溝跡(SD428・429)も検出されている。この建物跡はSD420、SX421と重複するが、これらよりも時期的に新しく、断面図に示したようにSD420がほぼ埋まった段階で建てられている。建て替え後の建物跡の柱間寸法は、西列では北から2.2m・2.0m、北列では西から2.7m・2.7mである。柱穴掘り方は不整方形状を呈し、長軸60～70cm・短軸50～60cm、深さは建て替え前が45cm、建て替え後は浅く35cmである。建て替え後の柱穴中央には径15cmほどの円形の柱痕跡が認められる。

なお、この建物跡に付属するとみられる溝跡SD428は、幅20～30cm・深さ5～10cm、SD429は幅40・深さ15cmの規模で、埋土は暗褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトの自然堆積土である。

【SB434】(第10図)　B区の西側で、南北2間、東西1間分検出した。柱穴掘り方は長軸90cm・短軸

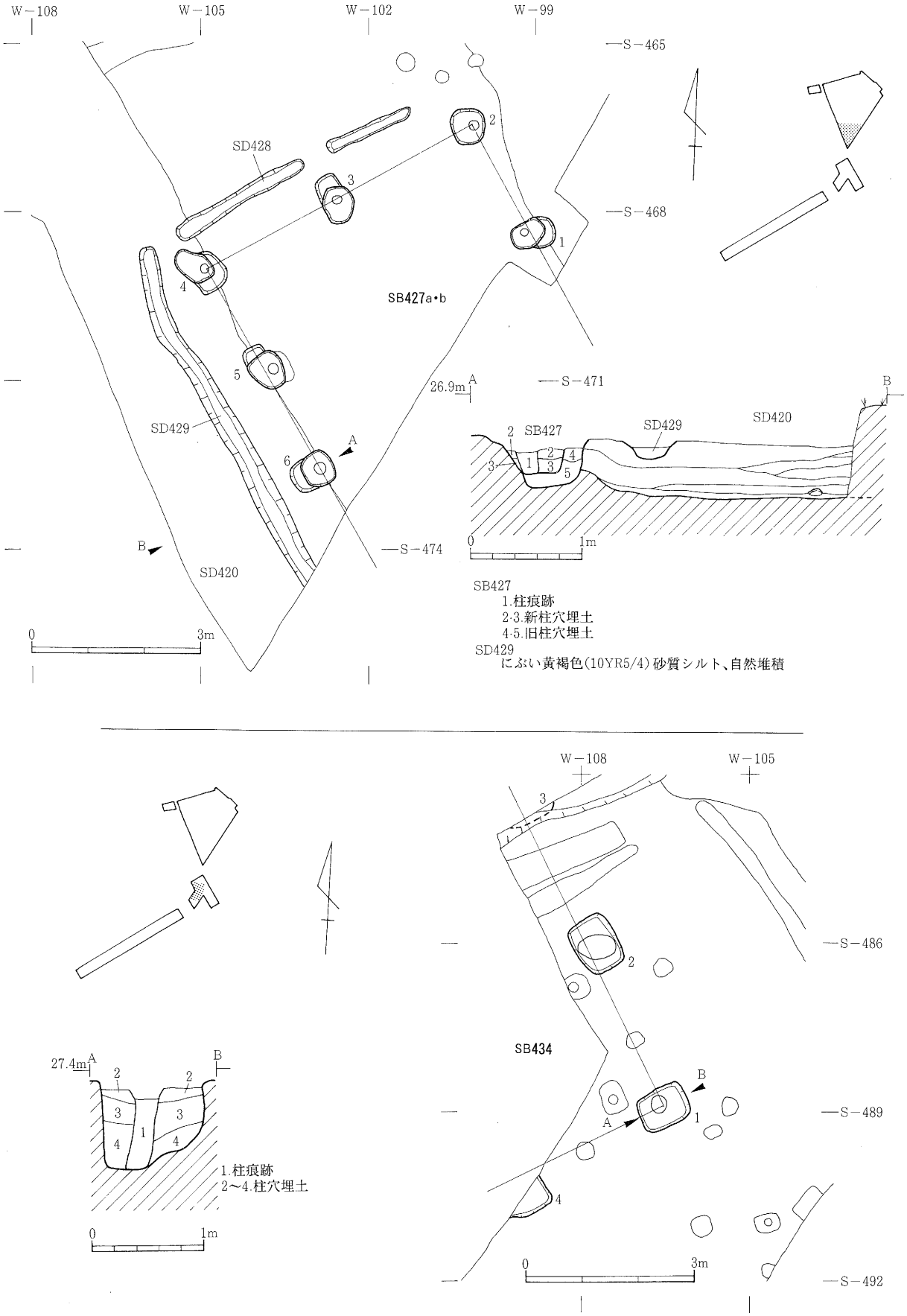


第９図　SB426掘立柱建物跡

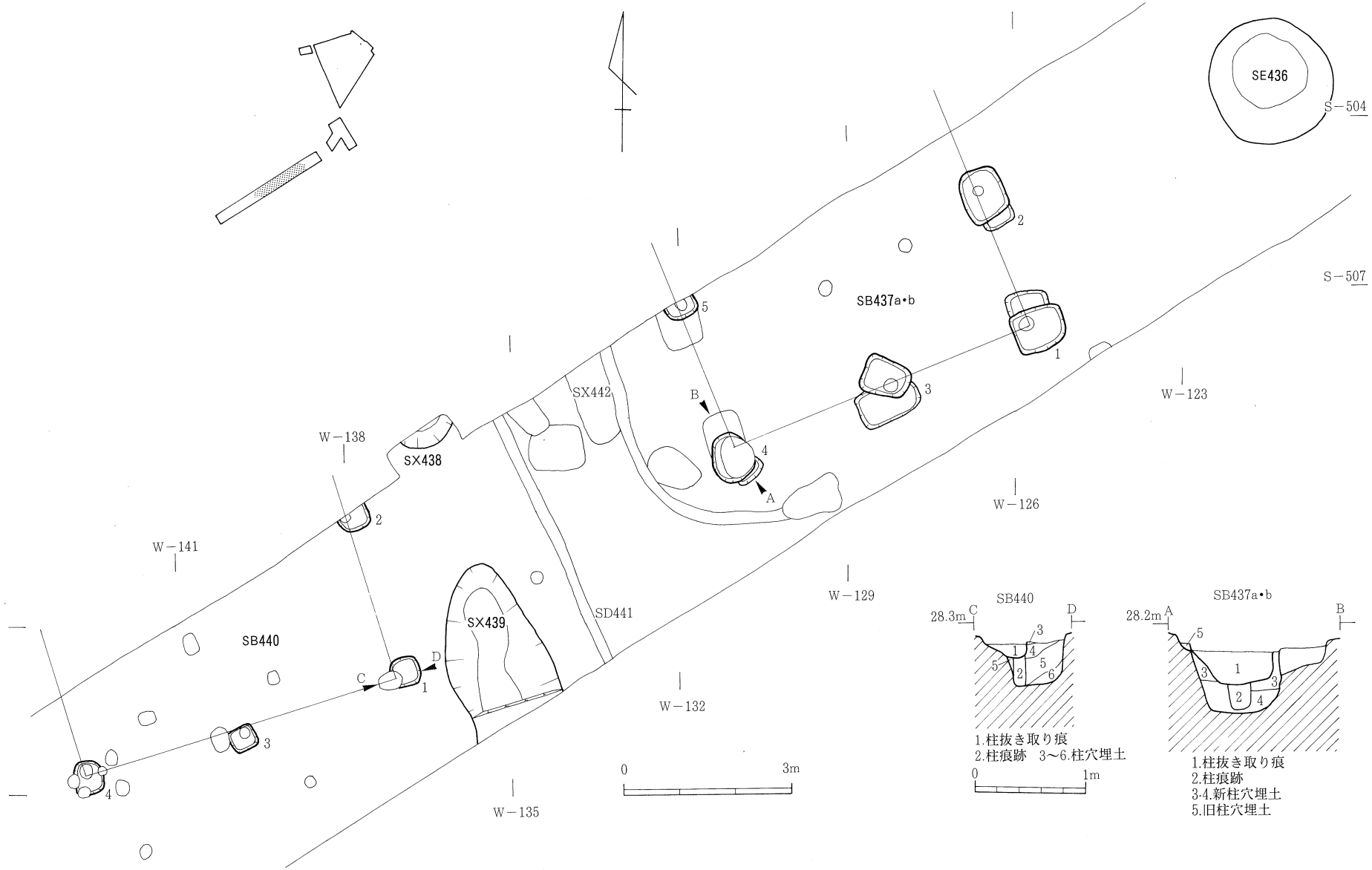
70cmの隅丸長方形、柱痕跡は径20cmの円形をなす。深さは約70cm。

【SB437】（第11図）　A区の中央からやや東寄りで、東西２間、南北１間分検出した。少なくとも一度建て替えがなされている。柱穴掘り方は長軸約１ｍ・短軸80cmの長方形状をなし、柱痕跡は径20cmの円形である。深さは約65cm。柱間寸法は、東西が西から(3.0ｍ)・2.6ｍ、南北が東側で2.6ｍである。

【SB440】（第11図）　A区中央付近で、東西２間、南北１間分検出した。柱穴掘り方は隅丸方形状で、一辺40～45cmとこれまでのものに比べ小さい。深さは約50cmである。柱間寸法は東西が3.0ｍ・3.0ｍ、南北が3.0ｍと等間である。一部の柱は抜き取られている。



第10図　SB427a•b　SB434掘立柱建物跡



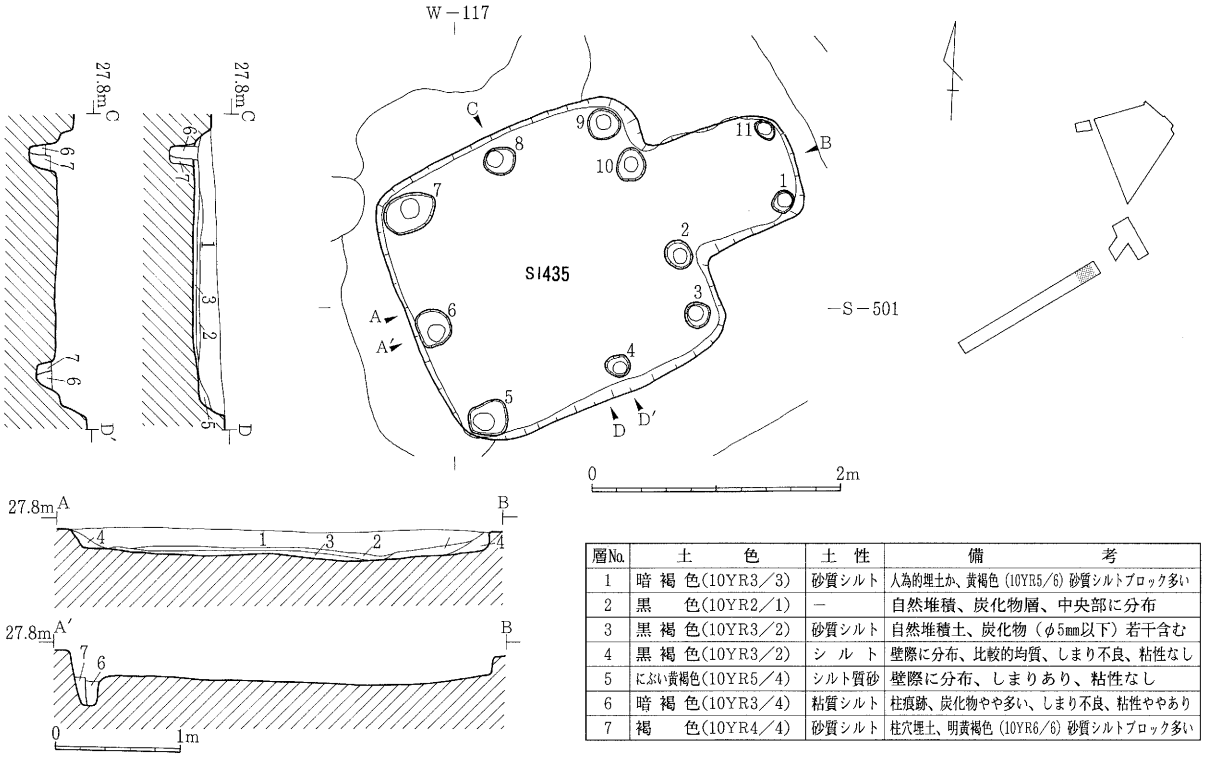
第11図　SB437・SB440掘立柱建物跡ほか

《竪穴遺構》

【SI435】（第12図）　A区東側で検出した。一辺が約2.3ｍの隅丸方形状で、東側に長さ約1.0ｍ、幅90㎝の張り出しが取り付く。深さは約20～30㎝。四方の壁際には左右対称に柱穴が11ケある。柱穴掘り方は径20～30㎝の円形をなし、中央に径10㎝ほどの円形の柱痕跡が認められる。床面は地山面で、硬化した区域などは特に認められなかった。

埋土は、下半は自然堆積土であるが、上半は人為的な埋土と思われる。床面近くの堆積土中には炭化物層（埋土２）の広がりが観察された。

遺物は、堆積土中から土師器・須恵器の細片が少量出土したのみである。



層No.	土　色	土　性	備　考
1	暗 褐 色(10YR3／3)	砂質シルト	人為的埋土か、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック多い
2	黒　色(10YR2／1)	－	自然堆積、炭化物層、中央部に分布
3	黒 褐 色(10YR3／2)	砂質シルト	自然堆積土、炭化物（φ5mm以下）若干含む
4	黒 褐 色(10YR3／2)	シ ル ト	壁際に分布、比較的均質、しまり不良、粘性なし
5	にぶい黄褐色(10YR5／4)	シルト質砂	壁際に分布、しまりあり、粘性なし
6	暗 褐 色(10YR3／4)	粘質シルト	柱痕跡、炭化物やや多い、しまり不良、粘性ややあり
7	褐　色(10YR4／4)	砂質シルト	柱穴埋土、明黄褐色（10YR6/6）砂質シルトブロック多い

第12図　SI435竪穴遺構

《井戸跡》

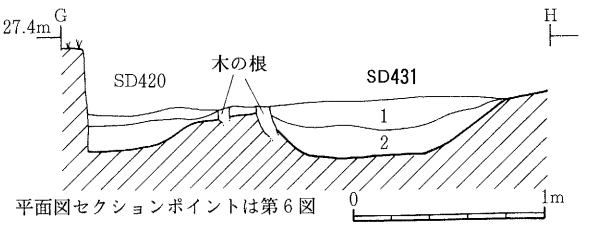
【SE436】（第11図）　A区の東側で検出した。掘り下げていないが、枠を据え付けた井戸跡と推定される。掘り方は円形で、径は約2.2ｍ、中央部には径1.2ｍほどの円形状に暗褐色砂質シルトの自然堆積土がみられる。

《溝　跡》

【SD431】（第６図・第13図）　B区の東側で検出した。南北に走るSD420大溝跡と並行しつつ重複し、これよりも時期的に新しい。北側で西へ折れて立ち上がる。確認長は約15ｍ、幅約1.2ｍである。一部を掘り下げたところ、断面形は浅い逆台形状で、深さは約30㎝ほどであった。堆積層は暗褐色～褐色砂質シルトの自然堆積層である。遺物は堆積層から土師器細片が若干出土したのみである。

【その他】（第５図）　A～C$_1$区では小規模な溝跡が多く確認されている。中には明らかに現代のも

の、あるいは古代までは遡らないとみられるものもあるが、SD425・430・432・441などのように時期が不明確な溝跡も多い。また、A区のSD441のように幅の狭い布掘り状を呈するものがあるなど、形状も様々である。



層No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色 (10YR3／4)	砂質シルト	自然堆積 小円礫(φ5mm)若干、しまり不良
2	褐色　(10YR4／4)	砂質シルト	〃　明黄褐色(10YR6／8)シルトブロック若干

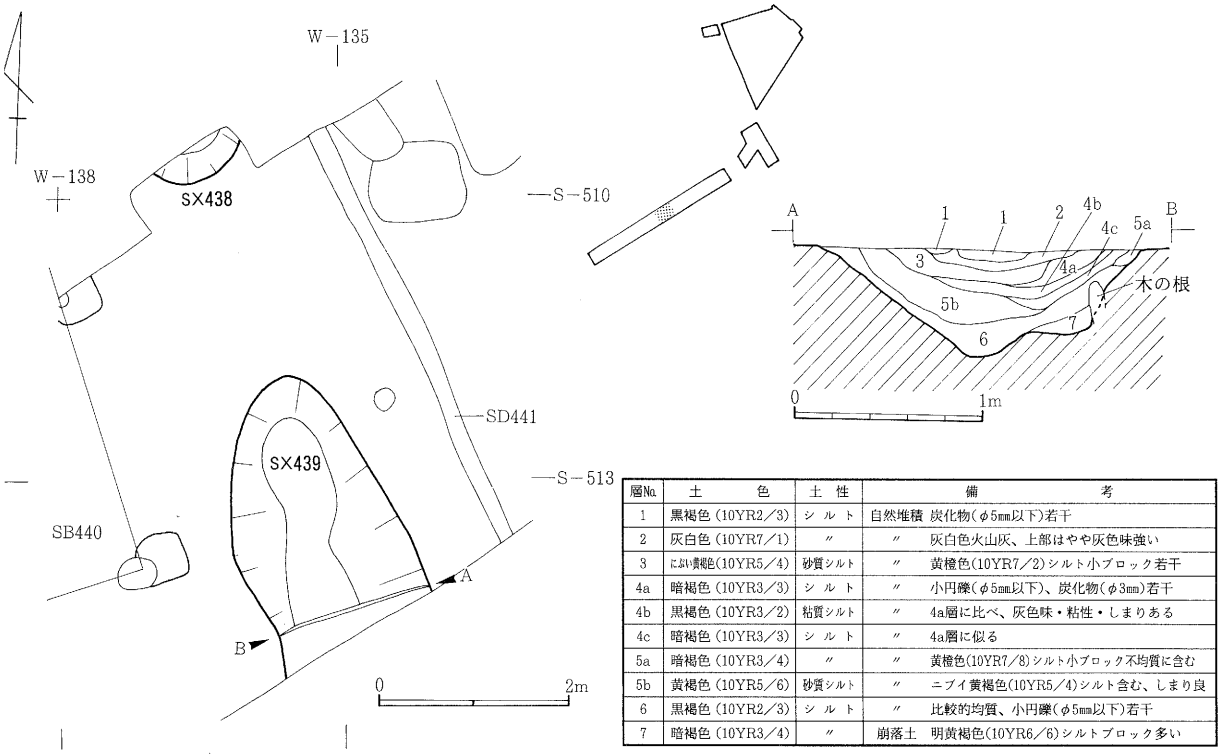
第13図　SD431溝跡

《その他》

【SX439】(第14図)　A区中央部で検出した。部分的な確認のためその他の遺構に含めたが、形状および堆積土からみると溝跡である可能性が強い。確認長は2.8ｍ、幅1.8ｍ、深さは約70㎝である。断面形は逆台形状に近いが、底面にはやや凹凸がある。堆積土は自然的なもので、上位には灰白色火山灰(10世紀前半)が認められる。

このSX439の延長線上で、調査区の北辺側を一部拡張したところ、SX439が立ち上がる地点から約2.3～2.4ｍ離れてあらたに落込み：SX438が確認された。これらは形状やその位置関係からみて一連のもの(区画溝？：間が出入り口)である可能性も考えられる。

なお、SX439では下部(埋土６層)から土師器細片が数片出土したのみである。

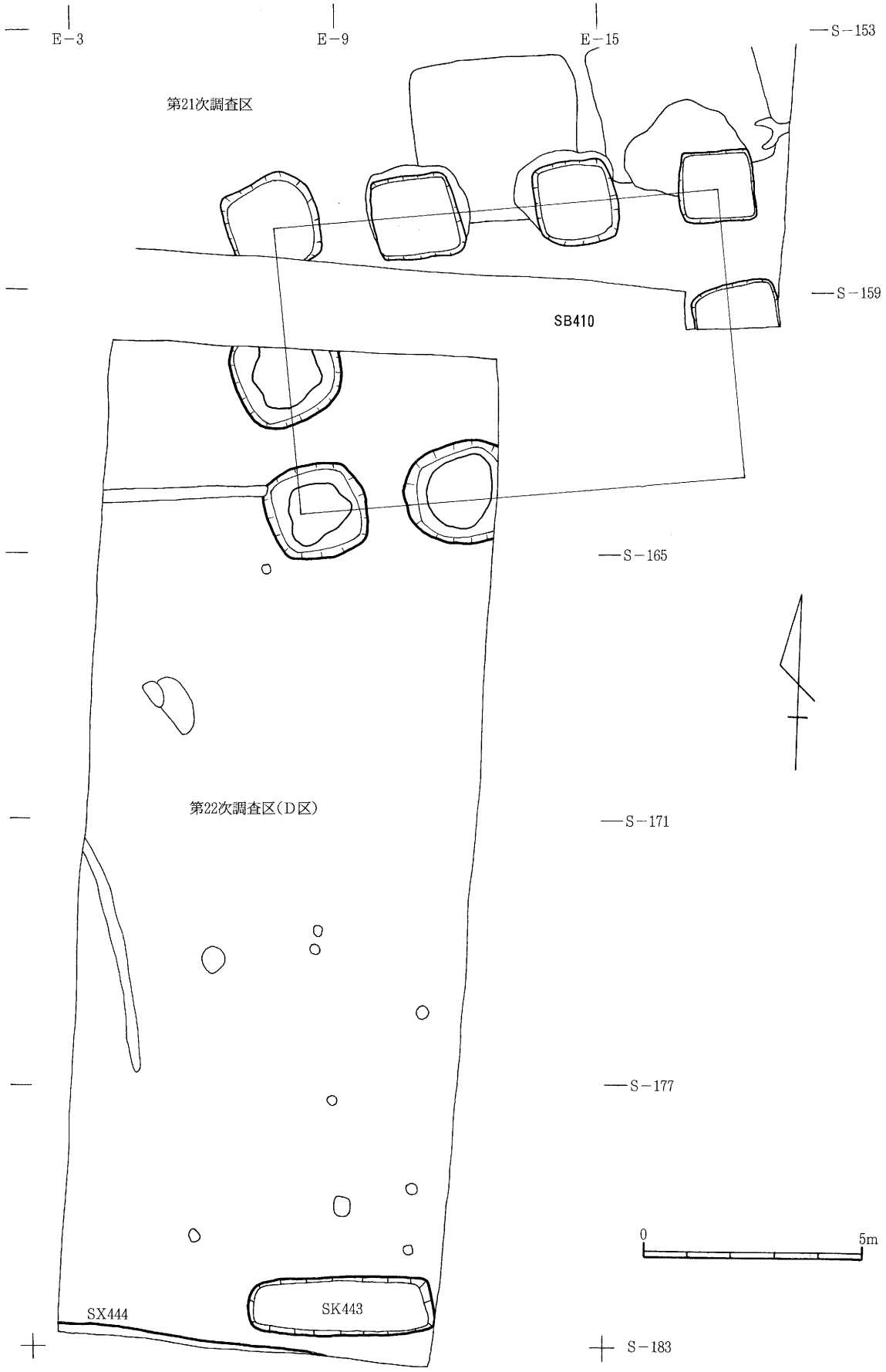


層No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色 (10YR2／3)	シ ル ト	自然堆積 炭化物(φ5mm以下)若干
2	灰白色 (10YR7／1)	〃	〃　灰白色火山灰、上部はやや灰色味強い
3	にぶい黄褐色(10YR5／4)	砂質シルト	〃　黄橙色(10YR7／2)シルト小ブロック若干
4a	暗褐色 (10YR3／3)	シ ル ト	〃　小円礫(φ5mm以下)、炭化物(φ3mm)若干
4b	黒褐色 (10YR3／2)	粘質シルト	〃　4a層に比べ、灰色味・粘性・しまりある
4c	暗褐色 (10YR3／3)	シ ル ト	〃　4a層に似る
5a	暗褐色 (10YR3／4)	〃	〃　黄橙色(10YR7／8)シルト小ブロック不均質に含む
5b	黄褐色 (10YR5／6)	砂質シルト	〃　ニブイ黄褐色(10YR5／4)シルト含む、しまり良
6	黒褐色 (10YR2／3)	シ ル ト	〃　比較的均質、小円礫(φ5mm以下)若干
7	暗褐色 (10YR3／4)	〃	崩落土　明黄褐色(10YR6／6)シルトブロック多い

第14図　SX438・439

② 内郭北地区（D区）

D区(約204㎡)では、昨年検出した掘立柱建物跡(SB410)の一部、他に土壙１基、円形周溝？１条などが発見された(第15図)。遺物は少なく、土師器・須恵器・瓦片が若干数と円面硯(１点)が出土したのみである(第16図)。



第15図　内郭北地区遺構図

《掘立柱建物跡》

【SB410】（第15図）昨年の調査では北側の東西３間分と東側１間分の柱穴を確認していたが、今回はこの建物跡の南側区域の一部を調査したところ、南西部の柱穴を３基検出した。これによって、この建物跡は東西３間、南北２間の東西棟であることが判明した。

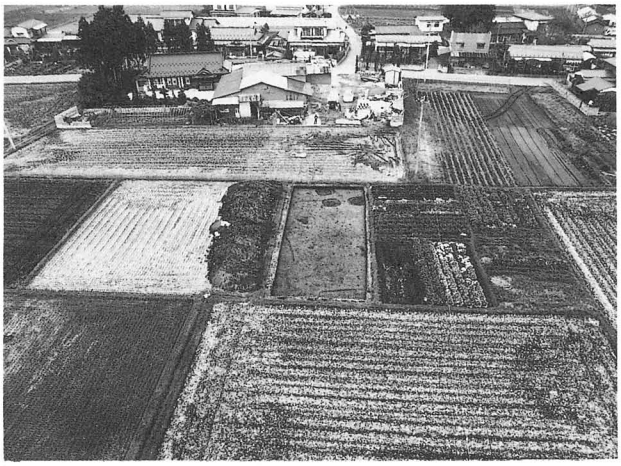


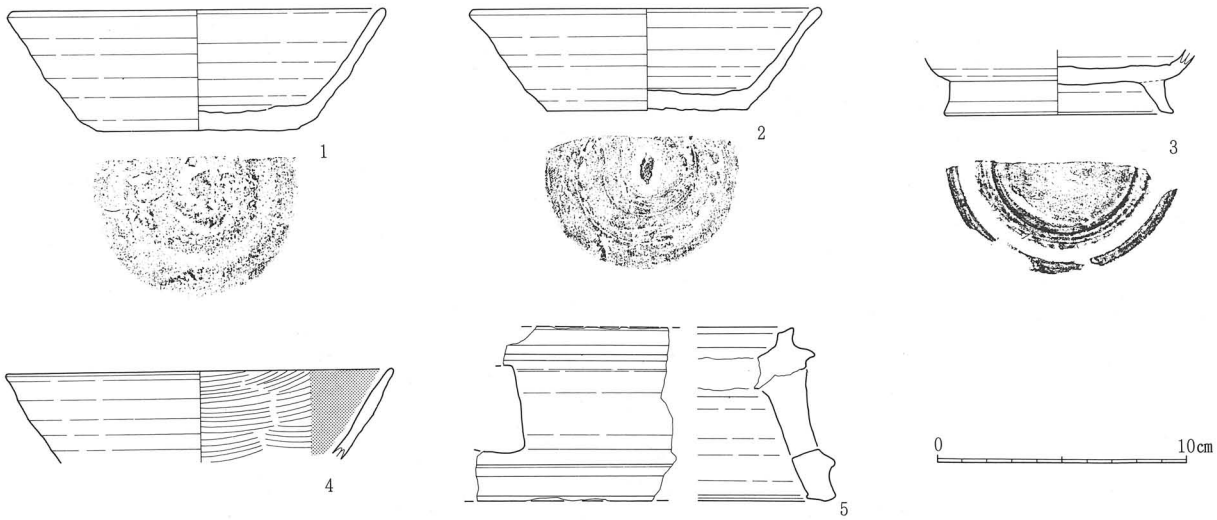
写真４　内郭北地区

この建物跡の柱穴は隅丸方形状で、一辺が約2.2ｍ～2.4ｍと非常に大きく、深さも昨年の調査では約1.6ｍになることが分かっている。いずれもその中央部に径1.4ｍ～1.5ｍほどの不整円形状の柱抜き取り痕が認められる。柱間寸法は、柱穴の中心点をもとにすると西側の柱列では3.3ｍ・3.3ｍで総長6.6ｍ、北側の柱列では3.3ｍ・3.7ｍ・3.4ｍで総長10.4ｍである。

この建物跡は位置的にみると政庁北側の中軸線上で、政庁北辺築地からは約63ｍの距離にある。建物跡の方向はN－８°－Wである。

《土　壙》

【SK443】（第16図）調査区の南側で検出した。平面形は長方形状で、長軸約4.2ｍ、短軸約1.3ｍである。深さは20㎝と浅い。底面はほぼ平坦である。埋土は１層のみで、暗褐色(10YR3／4)シルトに黄褐色粘質シルト小ブロックが多く混じり、一度に埋めもどされたような状況を呈する。



No.	器種	出土層	残存	法量（cm）			特徴	写真図版
				口径	底径	器高		
1	須恵器　坏	表土	1／2	(15.2)	8.0	4.9	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	9－13
2	〃　〃	〃	1／3	(14.2)	8.2	4.1	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	12
3	〃　高台付坏	〃	1／6	－	(9.1)	－	内外面：ロクロナデ	14
4	土師器　坏	〃	1／8	(15.6)	－	－	外　面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	15
5	円　面　硯	〃	1／8	－	－	－	内外面：ロクロナデ　短冊状の四角窓	16

第16図　内郭北地区出土遺物

遺物は埋土から土師器・須恵器の小片が若干数出土したのみである。

《その他》

【SX444】(第15図) 調査区の南端部にそってやや湾曲する暗褐色シルトの広がりが僅かに認められた。ごく一部の平面的な確認なので不明確ではあるが、その形状からするとこの周辺で前にも検出されたことがある円形周溝(古墳)の可能性もある。

4. 考　察

《外郭南西地区》

今回の調査の主要な目的は、伊治城跡の南西部の外郭線の確認であった。まずはじめにこれまでの外郭線の調査についてとりあげ、次に南西地区で今回検出した大溝跡・溝状遺構、その他の遺構について検討を加える。

①　これまでの外郭線の調査

これまでのところ外郭線についての調査は主に北側区域の数カ所で行われている(第17図)。しかし、一部を除いては断片的な調査にとどまっており、その位置や構造などについては未解明な部分が多い。

第１地点では前にも述べたように北辺の土塁と大溝跡の痕跡が今でも150ｍほどにわたって観察することができるが(第17図)、この区域の一画を多賀城跡調査研究所が調査したところ、これは幅約7.5ｍ・現存高2.5ｍの土塁と幅約10ｍ・深さ約3.5ｍの大溝跡であることが明らかになった(多賀城跡調査研究所 1978)。この東側の第２地点では水道管埋設および道路整備にともなって調査が行われ、ごくせまい範囲の調査であったものの、南北にはしる幅3.5～４ｍ・深さ60～70㎝の溝跡が２条検出されている。同様に、西側の第３地点でも道路整備に伴って幅約10ｍ・深さ2.5ｍ以上の大溝跡と幅2.0ｍ・深さ1.3ｍの溝跡が発見されている(築館町教育委員会 1990・1991)。

第４地点は発掘調査ではないが昭和37年に撮影された写真が残っており、これによれば台地縁辺にそって南北にはしる土塁と大溝の痕跡をみとめることができる。ただし、この地点は後に鹿島堰改修によって失われており、現在では観察できない。なお、この場所から南へ降った地点では宮城県多賀城跡研究所が電気探査を実施し、丘陵末端部から約30ｍの地点で溝状の落込みを検出しているが、これは南北方向の延びが不明確で外郭線大溝とは断定しかねるという結果であった(多賀城跡調査研究所 1979)。

以上のように、これまで外郭線については北辺の一部をのぞいては断片的な手がかりしか得られておらず、その構造や規模についてもまだはっきりしていない。しかし、これまでの調査結果からみる限り、伊治城の外郭線は基本的に土塁と大溝によって構成され、そのラインは遺跡が立地する台地の縁辺を走っていると考えてよさそうである。

②　南西地区：大溝跡と溝状遺構

遺跡の立地する台地は平坦な方形状のほぼ独立した地形であるため、外郭線を台地縁辺に比較的求

第17図　外郭線調査地点(X)と外郭推定線

めやすい。しかし、台地は南西部で背後の丘陵と連なっており、この地点は外郭線の位置を地形から想定するには難があった。そこで、今回は南西部の丘陵裾部から北東の内郭方向へ調査区を設定して外郭線の位置を確認することにしたわけであるが、調査の結果、現在の地境に一致してSD420大溝跡

とその内側(内郭側)には平行する２条の溝状遺構：SX421・422が検出された。これらは内郭南西隅の地点から南西方向へ約100ｍのところにあたる。

このSD420大溝跡は総長約50ｍほど確認しており、北および南側へさらに直線的に延びることは確実である。深さは約50～60㎝と浅いものの、幅は約4.5～５ｍほどある。これと平行して走る２条の溝状遺構は、埋土を観察するとすぐに埋め戻されたような状況を呈し、形状も通常の溝とは異なって両辺が曲がりくねっている。これらの遺構は、ともに伴う遺物が少ないため年代的な位置づけが不確実ではあるが、出土遺物(第８図)は伊治城跡の年代(８世紀後半～９世紀初め)の中にはおさまるものである。

ところで、伊治城跡の内郭および政庁の区画施設においては、その外側には大溝があり、その内側には築地塀などの構築に使われた土取りの痕とみられる溝状の遺構がある。また、外郭東辺とみられる第２地点においては２条の溝が確認されており、内側の溝は土取り後埋め戻されたような状況をもつ。こうしたことを考えあわせると、当地区の大溝跡と溝状遺構はともに区画施設に関わる遺構であり、SD420大溝跡は区画施設の一部、平行して走る溝状遺構は区画施設(例えば土塁)の構築のための土取り痕と考えることが可能である。つまり、地形的な位置や年代からみてSD420大溝跡は伊治城の「外郭」区画施設の一部と捉えられるものである。

この場合、北辺の状況からすると大溝と共に区画施設を構成するものに「土塁」が想定される。しかし、今回の調査では土塁の痕跡は確認できなかった。現時点ではこれは削平によって失われたものとみておきたいが、土塁があったとすれば位置的にはSD420とSX421溝状遺構の間(幅４～５ｍ)が考えられる。いずれ、今後の延長線上の調査によって今回の遺構の性格が定まり、さらに、これまで触れなかったが溝状遺構(土取り痕)が２条ある理由なども解明できるようになるものと思われる。

さて、SD420大溝跡が外郭区画施設の一部であると考えると、南西部をとおる外郭線の位置が概ね推定でき、これと遺跡の立地する地形を考え併せれば、伊治城の外郭線の位置はおおよそ第17図の破線のように描くことが可能である。ただし、これはあくまで現在までの少ない調査結果にもとづいた想定であり、今後も更に多くの地点で調査を行って外郭線の位置を確定し、その構造・規模などを解明していく必要があろう。

③　南西地区：その他の遺構

外郭南西地区では大溝跡・溝状遺構の他に掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡、溝跡などが発見されている。これらの遺構のうち、SB427掘立柱建物跡は明らかにSD420大溝跡・SX421溝状遺構より新しく、SX435竪穴遺構は形態的には中世のものに類似しているなど、遺構の時期には幅がありそうである。しかし、周辺出土の遺物(表土など)は伊治城の年代から外れるものではなく、遺構の多くは伊治城時代のものと考えられる。特にSX439は上部に灰白色火山灰(10Ｃ前半)が堆積しており、伊治城時代に属する可能性が高い。

ここで重要な点は、SD420大溝跡を外郭区画施設とすると、SD420より西側の遺構群はその外側に位置するということである。つまり、外郭区画施設の外側にも遺構が展開するということになる。また、SX438・439は性格的には区画施設である可能性もあることから、この場合には外郭施設のさら

に外側にも区画施設を持った空間が存在するということにもなる。遺構はいずれも部分的な検出なので積極的には言えないものの、そうした可能性が充分考えられる。

《内郭北地区》

この調査区は昨年検出した大きな柱穴を持つSB410掘立柱建物跡の規模・構造の確認と言うこともあり、調査面積はせまく、特に新たな展開はなかった。

SB410についてみれば、建物の規模は2間×3間、面積も通常のものとそれほど違いがなく、特別な規模・構造ではないことがわかった。しかし、柱穴の大きさは一辺約2.2～2.4m・深さは1.6mもあり、政庁正殿(一辺1.5～1.7m・深さ約80cm)よりも一回り大きく、伊治城においては群を抜いている。また、この建物は位置的にみると、内郭の北側で政庁中軸線上にある(第4図)。こうした点から考えると、この建物は特別な役割を担ったものであることが容易に推察されるが、今後はその具体的な性格・機能が問われることになるものと思われる。

なお、この建物は昨年の調査(第21次調査)では遺構の新旧関係から時期的にはⅢ期(火災後に建て替えられた建物群)に位置づけられ、伊治城においては後半の段階に置かれている(築館町教育委員会1995)。

引用・参考文献

＊これまでの『伊治城跡』発掘調査報告書については、付表1を参照のこと

工藤雅樹　1989　『城柵と蝦夷』　ニューサイエンス社

小井川和夫・手塚　均　1978　「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』
宮城県文化財調査報告書第53集

小井川和夫・小川淳一　1982　「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』
宮城県文化財調査報告書第83集

進藤秋輝　1991　「城柵の設置とその意義」『北からの視点』　pp.131～142
日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集

付表１　『伊治城跡』調査および報告書一覧

◎多賀城跡調査研究所による調査

年　次	調　査　内　容	発掘面積	発　掘　期　間	備　　考	文献
昭和51年度 (1976)	地形図作成（航空測量） 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①北辺外郭線発掘調査 中央平坦部地区発掘調査	168㎡ 270㎡	7／4～8／3	大溝１、土塁１、土塁状遺構１ 焼失竪穴住居１、墨書土器「城厨」	(1)
昭和53年度 (1978)	②中央平坦部地区発掘調査 西辺外郭線地区電気探査	780㎡	7／3～8／4 11／11～11／13	竪穴住居４、掘立柱建物１、井戸６、溝５、 土壙４	(2)
昭和54年度 (1979)	③中央平坦部地区発掘調査	1,000㎡	10／29～12／4	竪穴住居17、掘立柱建物２、井戸、溝、土壙	(3)

◎築館町教育委員会・宮城県文化財保護課による調査

昭和62年度 (1987)	１．農道整備 ２．農協支所移転 ３．個人住宅便槽取付 ４．水道管埋設 ５．農道整備 ６．畜舎建築	220㎡ 150㎡ 2㎡ 1,250㎡ 1,080㎡ 80㎡	7／1～8／12 7／4～7／18 8／5 9／1～9／14 1／18～2／9 2／25	竪穴住居５（うち焼失住居１）、溝４、井戸１ 竪穴住居５、土壙１ 竪穴住居８ 竪穴住居７、土壙２、溝	(4)
昭和63年度 (1988)	７．国庫補助事業 ８．水道管埋設 ９．農道整備	1,500㎡ 142㎡ 504㎡	7／1～10／30 11／4～11／24 2／6～2／12	内郭区画溝2、竪穴住居2、土壙、円形周溝１ 東辺外郭大溝１？、竪穴住居３、溝	(5)
平成元年度 (1989)	10．宅地現状変更 11．国庫補助事業 12．通学路整備 13．農道整備 14．水道管埋設	480㎡ 1,200㎡ 1,700㎡ 1,960㎡ 170㎡	4／11～6／1 7／21～11／22 9／5～9／16 10／16～11／10 11／29～12／8	竪穴住居８、掘立柱建物１、土器埋設土壙１ 内郭区画溝１、掘立柱建物３、竪穴住居９ 北辺外郭大溝２、古墳時代前期溝１ 内郭区画溝２、〔政庁域〕掘立柱建物・溝 竪穴住居３	(6)
平成２年度 (1990)	15．国庫補助事業 16．道路整備（大堀線）	900㎡ 1,320㎡	9／3～9／29 9／27～10／5	掘立柱建物３、竪穴住居８、円形周溝１、井戸２ 東辺外郭大溝２？、竪穴住居16、溝、井戸、土壙	(7)
平成３年度 (1991)	17．国庫補助事業 18．個人住宅	1,300㎡ 300㎡	5／27～7／16 11／19～12／2	〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・築地 古墳時代居館跡	(8)
平成４年度 (1992)	19．国庫補助事業	1,300㎡	5／11～7／4	〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・南門・築地 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、溝、土壙	(9)
平成５年度 (1993)	20．国庫補助事業	1,500㎡	10／4～11／18	〔内郭南東隅〕築地、掘立柱建物、竪穴住居 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、土器埋設	(10)
平成６年度 (1994)	21．国庫補助事業	820㎡	10／3～11／27	〔内郭北側〕掘立柱建物、竪穴住居、溝 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、古墳	(11)

(1)宮城県多賀城跡調査研究所　1978　『伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告－』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第３冊」
(2)　〃　1979　『伊治城跡Ⅱ－昭和53年度発掘調査報告－』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第４冊」
(3)　〃　1980　『伊治城跡Ⅲ－昭和54年度発掘調査報告－』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第５冊」
(4)築館町教育委員会　1988　『伊治城跡－昭和62年度発掘調査概報－』「築館町文化財調査報告書第１集」
(5)　〃　1989　『伊治城跡－昭和63年度発掘調査概報－』「築館町文化財調査報告書第２集」
(6)　〃　1990　『伊治城跡－平成元年度発掘調査概報－』「築館町文化財調査報告書第３集」
(7)　〃　1991　『伊治城跡』「築館町文化財調査報告書第４集」
(8)　〃　1992　『伊治城跡－平成３年度発掘調査報告書－』「築館町文化財調査報告書第５集」
(9)　〃　1993　『伊治城跡－平成４年度発掘調査報告書－』「築館町文化財調査報告書第６集」
(10)　〃　1994　『伊治城跡－平成５年度発掘調査報告書－』「築館町文化財調査報告書第７集」
(11)　〃　1995　『伊治城跡－平成６年度発掘調査報告書－』「築館町文化財調査報告書第８集」

付表２　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和　暦	記　事	文　献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769			続日本紀
	3	1．伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
		2．桃生・伊治に板東８国の百姓を募り安置しようとする。	続日本紀
		6．栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 （「続日本紀では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲３年６月９日乙巳説をとる）	
		6．浮宕の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝亀11	3．上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1．斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げられて果たせないでいることを訴える。	類聚国史巻190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に１駅を置く。	日本後紀
		11. 相撲・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に３駅を置く。	日本後紀
837	承和4	4．３年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 （着手）	延喜式 ○神名式　陸奥国100座 栗原郡７座　大１座　表刀神社 小６座　志波姫神社 雄鋭神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各５疋	
931 ～ 938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄

報告書抄録

ふりがな	いじじょうあと
書名	伊治城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	築館町文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	佐久間　光　平
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980　宮城県仙台市青葉区本町3－8－1　TEL　022－211－3682
発行年月日	西暦　1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
伊治城跡（いじじょうあと）	宮城県 栗原郡（くりはらぐん）築館 町字（ちょうあざ）城生野（じょうの）	045217	41007	38度 45分 50秒	141度 02分 40秒	19951005 ～ 19951114	1,140	外郭確認 ほか

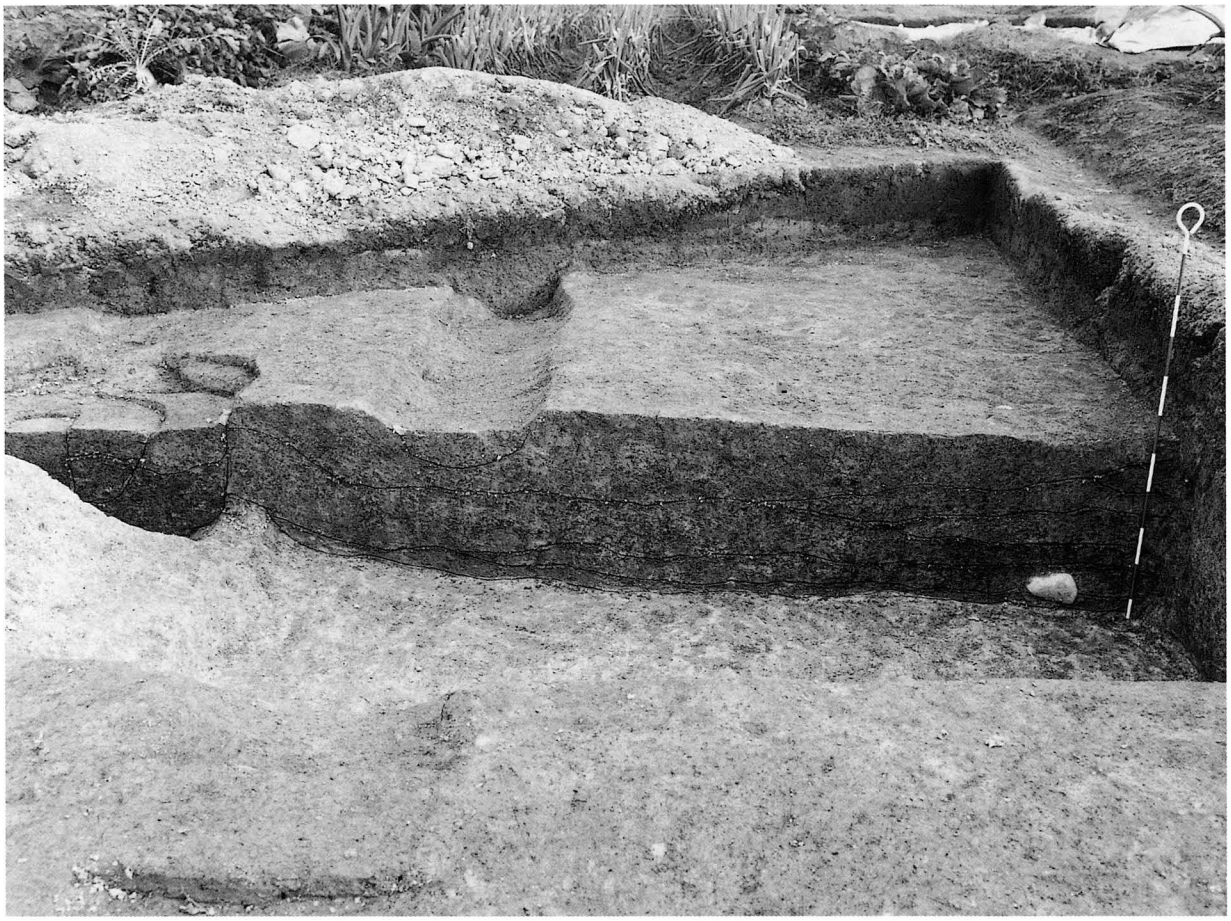
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊治城跡	城柵跡	奈良～ 平安時代	掘立柱建物跡　6棟 竪穴遺構　1軒 大溝跡　1条 その他の溝跡　9条 溝状遺構（土取り痕）　2条 井戸跡　1基 土壙　1基	土師器 須恵器 瓦 鉄製品（釘） 鉄滓	大溝跡および溝状遺構（土取り痕）は、南西部外郭区画施設に関わる遺構と推定される。

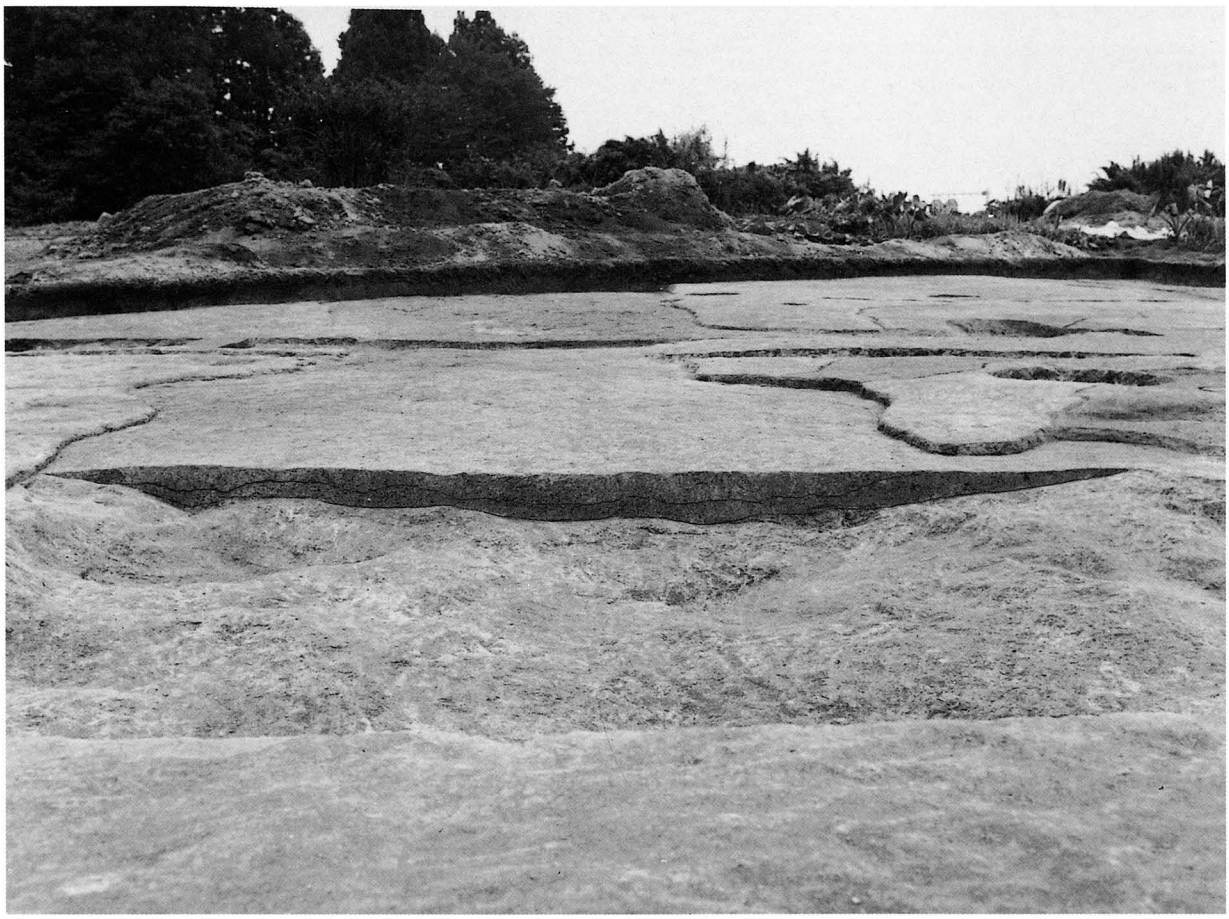
写　真　図　版

図版1　上：外郭南西地区遠景（南から）　下：外郭南西地区

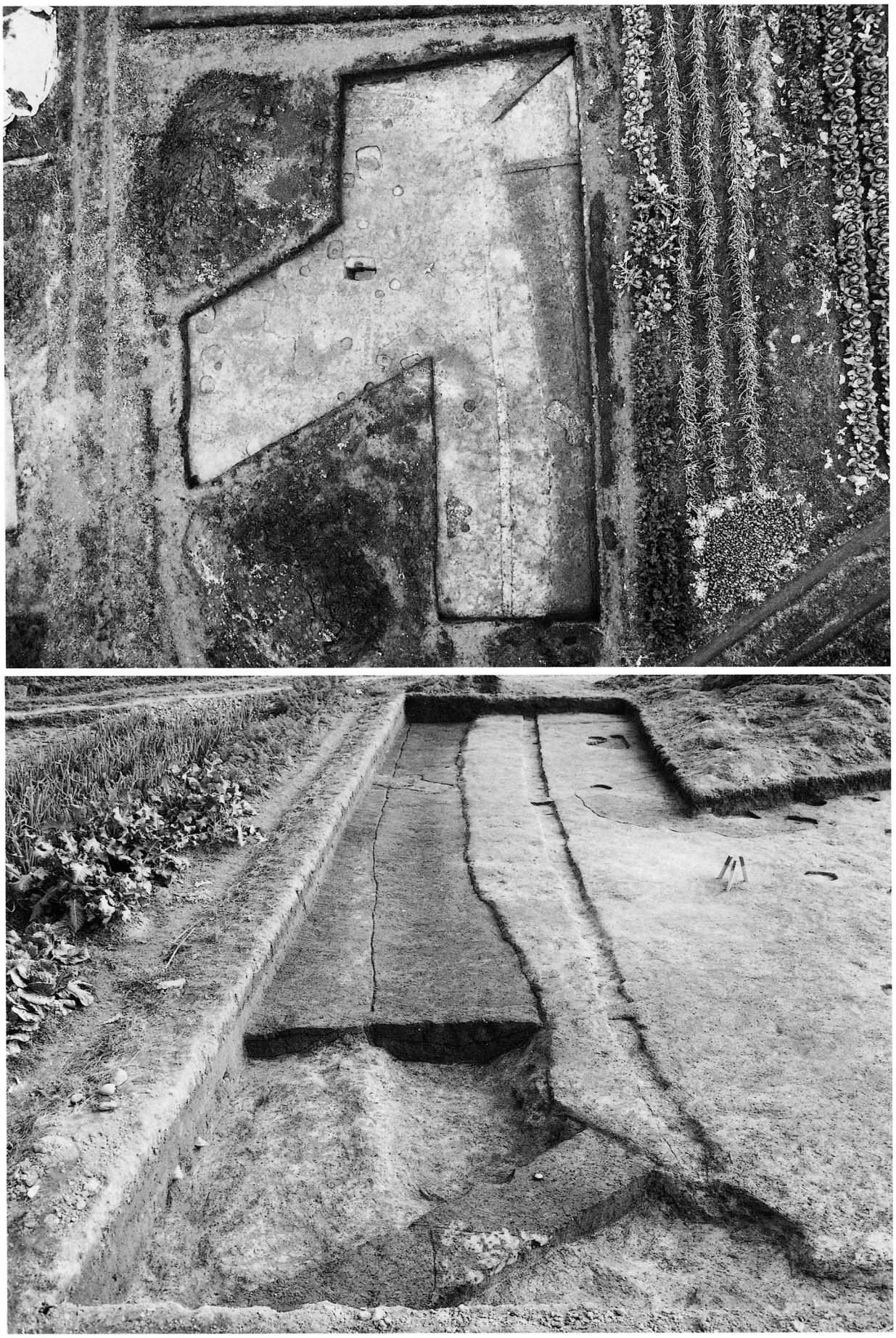
図版２　上：外郭南西地区（$C_{1\cdot2}$区）　下：C_1区 SB426（西から）

図版３　上：C_1区 SB427　下：C_2区 SD420大溝跡(北から)

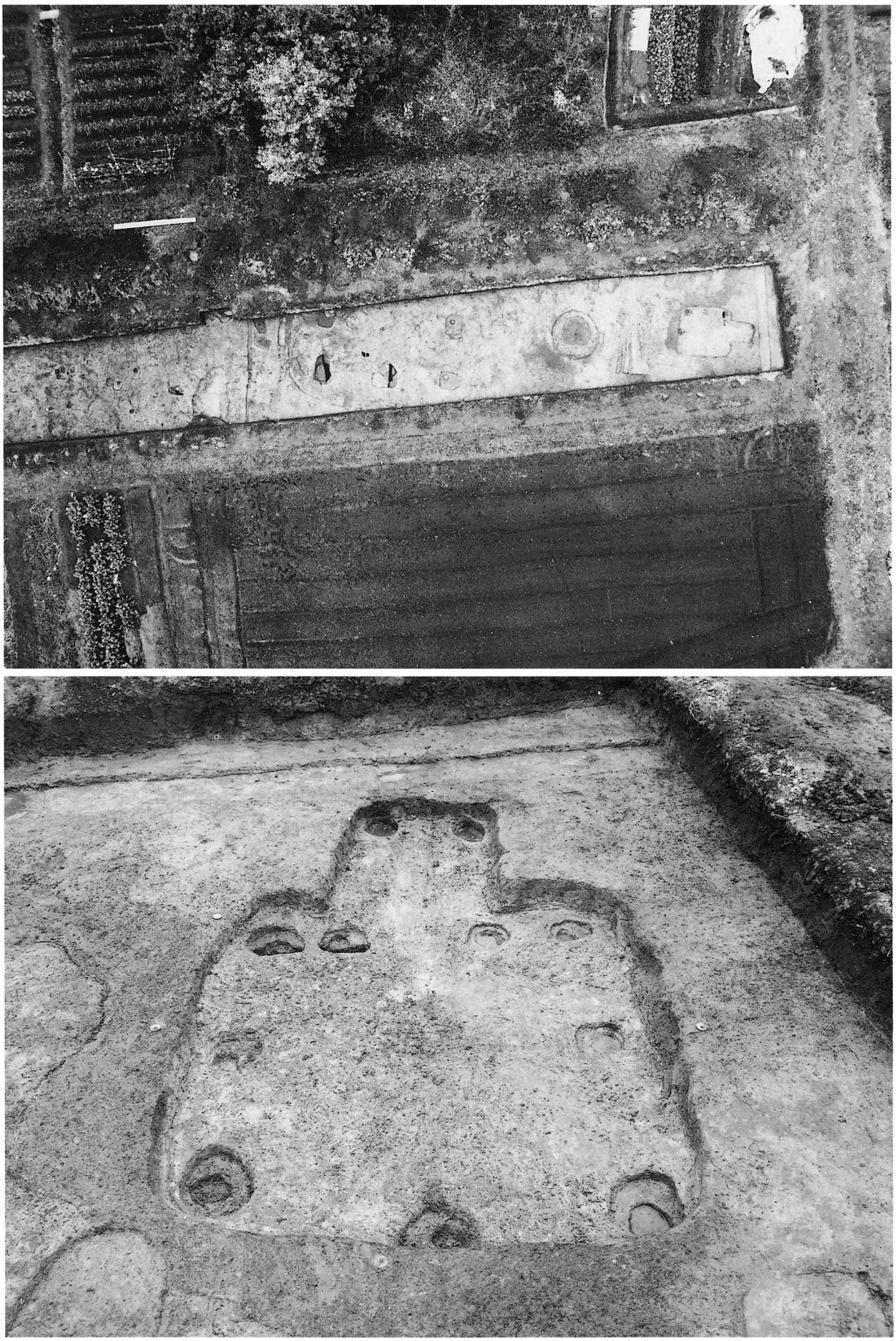




図版４　上：C_1区 SD420大溝跡断面(北から)　下：SX421断面(北から)



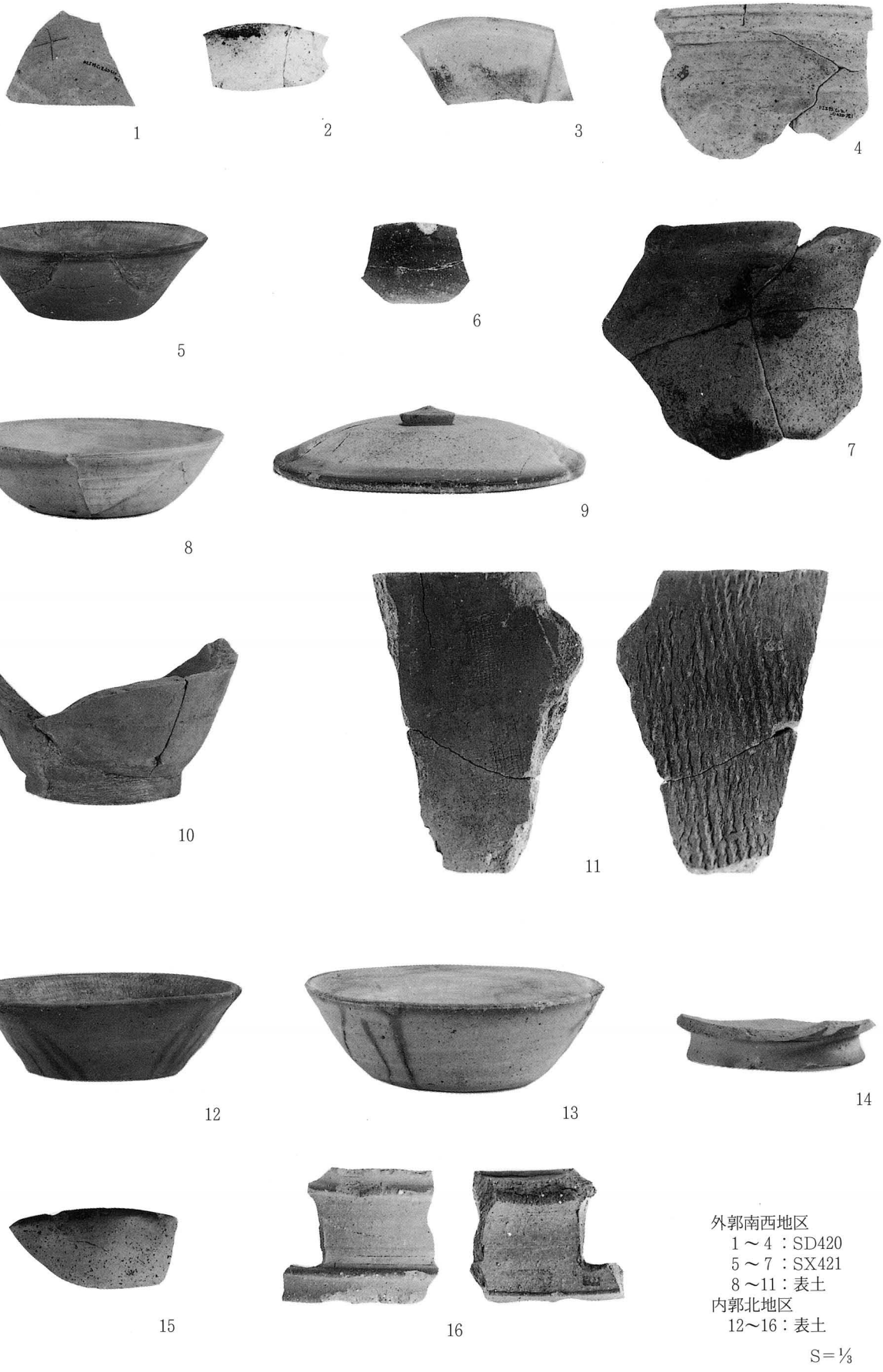
図版５　上：Ｂ区　下：Ｂ区　SD420・SD431（北から）



図版６　上：Ａ区　下：Ａ区　SX435竪穴遺構（西から）

図版７　上：Ａ区　SX438・SX439　下：Ａ区　SX439断面（北から）

図版８　上：内郭北地区（Ｄ区）　下：SB410



外郭南西地区
1～4：SD420
5～7：SX421
8～11：表土
内郭北地区
12～16：表土

S＝⅓

図版9　出土遺物

築館町文化財調査報告書　第９集

伊　治　城　跡

印　刷　平成８年３月20日
発　行　平成８年３月31日

発　行　築館町教育委員会
宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7-1

印　刷　㈱小野寺印刷所
宮城県栗原郡築館町伊豆一丁目7-3